【HERO】使いの少女は。

連鎖/爆撃

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

昔なつかし【ＨＥＲＯ】デッキ片手に、少女は行く。

「ほえー、クロノス先生ちょー強い」

目次

入学試験 ―― 1
ＶＳ万丈目 ―― 29
闇夜の巨人デュエリスト ―― 55

入学試験

私が最初に組んでいた〝十代デッキ〟は、とてもじゃないが使用に耐えた代物ではない。

スリーブに入れずに使用していたから、カードの角は取れてしまってボロボロだし、通常モンスター過多で【融合】も一枚足りない。【強欲な壺】や【天使の施し】も、禁止カードだってことを知らなかったからずっと刺しっ放しだ。今となっては、ヒドすぎて笑えてくる。

それでも、私にとって最高の相棒だったデッキ。

……いつからか、机の奥にしまいっぱなしになってしまった。

何回もあしらわれ。

何回も笑われ。

何回も「弱い」と言われて。

それでも、デュエルができるだけで純粋に楽しかった。

【フレイムウイングマン】が出せたら、最高に興奮した。

ロマンコンボ以前の、本当にデザインが好きなカードだけで組んでいたデッキ。

戦略も勝算も無く、「このデッキの切り札さえ出せたら、勝てる！」なんて盲信で組み上げられたデッキ。

この懐かしさを他人に話せば、馬鹿にされるかもしれない。

「子供の遊びに何をムキになっていたんだ」とか、「もう卒業したんだろ？」とか。

それが普通。それが常識。

でも。それでも。

……わかっている。

こんなの、ただの感傷だ。

私がこの世界に来てから組んだ【ＨＥＲＯ】デッキ。

このデッキで勝ち続けたら。

私はあちらの世界に残してきてしまったあのデッキに、「私は強く

なった」と、胸を張ることができるんだろうか？

◆　◆　◆　◆

鋼鉄の巨人を、〝ヒーロー〟が打ち倒し、今一つのデュエルが終わりを迎えた。

「ガッチャ！楽しいデュエルだったぜ！」

……生十代カッコいい。

……私もちょー頑張らなきゃ。

〝受験番号１１１番、デュエル場へ〟

……私の番。

鞄から、デッキとデュエルディスクを取り出す。

ディスクを装着し、デッキのセッティングまで済ませてデュエル場まで向かった。

「あなたも遅刻ですーノ？」

……すみません。

「全く今年の受験生ときたら……」

ブツブツと何かを呟くクロノス教授。

その声を聞いて、胸が懐かしさで一杯になる。

「これ以上の無様を晒すわけには、いかないですーノ！」

クロノス教授と私は、フィールドの端と端で向き合う。

どちらからともなくディスクを展開し、

――デュエル！

――……デュエル！

静かに、だが熱い闘志を秘めた掛け声とともに、デュエルが始まった。

「ちょっと、タンマ！タンマですーノ！」
ずっこけそうになった。
引いた自分の手札を見て、クロノス教授が慌てている。
……手札が悪かったんですか？
でも、だからと言って引き直しは「違うんですーノ！デッキを間違えたんですーノ！」……え？
ばつが悪そうな顔をするクロノス教授。
「お恥ずかしい話、先程の受験生には私の本気のデッキで相手をしてしまったノーネ」
……主人公、遊城十代とのデュエルですね。
「でも本来、それは試験で使っていいモノではないノーネ。
うっかりしたことに、デッキを換え忘れてしまったノーネ。
あなたの手札はそのままでいいので、試験用のデッキと交換する許可を頂きたいデスーノ」

……そのままで、お願いします。
デュエルコートを操作する手を止めるクロノス教授。
何かを言おうとするのを私は手で制し、言葉を紡ぐ。
……そのままのデッキで戦ってもらいたい理由は２つ。
一つは、試験に遅れてきたせいで、私が試験用のデッキの内容を把握していないからです。
先程のデュエルなら拝見したので、私は教諭のデッキの内容を……切り札が何なのかを分かっています。
情報アドバンテージを得たまま戦えます。
せこい自覚はあるんですけど、教諭相手なら、それくらいのハンデがあっても良いかなと思いまして。
もう一つの理由は……失礼ながら。私も一人のデュエリストだからです。

……私は侮(あなど)られるのが大嫌いです。

黙って話を聞いてくれていたクロノス教諭が、憮然とした表情で言った。

「今年の受験生は、揃いも揃って、私をコケにしてくれるノーネ」

そして、手札を構え直す。

「あなたがドロップアウトガールに過ぎないことを教えてあげましょう！かかってくるノーネ！」

……行きます！私のターン！

ドロー！

引いたカードを確認する。

……今日の私なら、きっとクロノス教諭に勝てる。

私が1ターン目で引き込んだのは、1体しかいない、このデッキのエースモンスターだった。

私は、モンスターを攻撃表示で召喚！

召喚されたモンスターを見て、ギャラリーがざわついた。

クロノス教諭が苦々しい顔をして呟く。

「あなーたも、【ＨＥＲＯ】使い」

――――私が召喚したのは、一体の【ＨＥＲＯ】。両の肩で風を受け、重力に抗い、宙を翔(か)ける。

？

ＬＰ４０００

手札５

【Ｅ・ＨＥＲＯ(エレメンタルヒーロー)エアーマン】☆４　攻撃力１８００

◆　◆　◆　◆

ざわつきが収まるのを待って、私は宣言する。

【エアーマン】の効果を発動！

デッキから、【Ｅ・ＨＥＲＯフェザーマン】を加える！
【Ｅ・ＨＥＲＯフェザーマン】☆３　通常モンスター
「なぁ、あいつ今、召喚したモンスターより弱いモンスターを手札に加えたよな？」
「わざわざ下級通常モンスターをサーチだと？セオリーから外れてやがる」
私のプレイングにギャラリーから疑問の声があがる。
だが、そこに嘲るような色は無い。
「あなたも、【融合】を……！」
会場には、まだ前の戦いの熱が残っている。
【エアーマン】は、【ＨＥＲＯ】であれば、レベルに関係なくデッキから手札に加えることができる。生け贄召喚に繋げるなら、上級モンスターを加えるべきなのに、わざわざ下級の【フェザーマン】を加える理由。
さすが、クロノス教諭。そして、ギャラリーのアカデミア生。狙いはバレバレらしい。
私はカードを２枚伏せます。
ターンを終了。
「ワターシのターン！」
クロノス教諭がカードをドローする。心なしか、気合いが入っているような……。
「あなたが【ＨＥＲＯ】使いなのは好都合なのーネ！
私の全力を持ってアナータを打ち倒し！
ドロップアウトボーイに敗北した汚名を雪がせてもらうノーネ！」
クロノス教諭が吼える。
ビリビリと気迫が伝わってくる。
次の瞬間、応えるようにデュエル場がその姿を変えた。
大量の歯車が足元から迫り出してくる。
うわ、何!?
無限の剣製!?
私が驚いている間にフィールドは姿を変え終える。

クロノス教諭と私は、巨大な歯車だらけの荒廃した街に立っていた。
……これってまさか、フィールド魔法？
クロノス教諭が２本の指で、トントンとデュエルコートの上の方を叩いている。
「フィールド魔法、【歯車街（ギア・タウン）】ナノーネ」
……デュエルコートは、あの部分にフィールド魔法が入るのか。
……あの仕草、かっこいい。
いけないいけない、デュエルに集中しなきゃ。
私が余計なことを考えている間にも、デュエルは進む。
「さらに私は、【古代の機械城（アンティーク・ギアキャッスル）】を発動！
そして、【古代の機械獣（アンティーク・ギアビースト）】を召喚！」
フィールド【歯車街】
クロノス
手札３
ＬＰ４０００
【古代の機械獣】☆６　攻撃力２０００→２３００
／【古代の機械城】永続魔法
場の【古代の機械】モンスターの攻撃力を３００上げる。
上級モンスターを生け贄無しで召喚!?　嘘でしょ!?
「上級モンスターを生け贄無しで召喚だと!?」
……観客席の三沢くんとハモった。
三沢くんが驚いたってことは、やっぱり凄いことなのか。
「これが【歯車街】の効果ナノーネ！
【古代の機械】モンスターの生け贄召喚に必要な生け贄を一体減らすことができるノーネ」
え、何そのフィールド魔法、めちゃくちゃ強い！
私が目を白黒させてる間に、クロノス教諭が攻撃を仕掛けて来た。
「【機械獣（ギア・ビースト）】の攻撃！」
受けきる手段が……！
鋼鉄の獣が飛びかかってくる。

私を庇うように立ちはだかってくれた【エアーマン】が戦闘破壊された。
【エアーマン】……！
？
ＬＰ４０００→３５００
……クッ！　だけど、負けない！
この手札なら、次のターンで……！
「メインフェイズ２に移行するノーネ！【押収】を発動！」
【押収】通常魔法
１０００のライフを払う。相手の手札を確認し、その中から１枚を選んで捨てる。
待って!?　待って!!?
クロノス先生ってば、それ禁止カードだよ!?
えっ、あ！　そうだ、アニメＧＸだと使えるの!?
トラウマを刺激され固まってるうちに手札を覗かれてしまう。
【Ｅ・ＨＥＲＯフェザーマン】
【融合】
【サイクロン】
【融合】を捨てられたら、勝ち目が……。
私の手札を覗いて、何事かを考えるクロノス教諭。
教諭の前に浮かぶ私のカードのビジョン。
クロノス教諭は【フェザーマン】を素通りし、スゥーッと【融合】の上に指をなぞらせた。
……ダメ……やめて。
無駄だとわかっていても、祈らずにはいられなかった。
「ワターシが選択するのは、【サイクロン】！」
……え？
「何を呆けているノーネ？早くカードを墓地に」
はっ、ハイ！

慌てて【サイクロン】を墓地に送る。助かっちゃった。でもなんで？

「私はカードを1枚セット。ターンエンドなのーネ！」

クロノス

手札1

ＬＰ４０００

【古代の機械獣】★6

攻撃力２３００

／【古代の機械城】永続魔法

＼セットカード1枚

……わ、私のターン、ドロ……「この瞬間！」

私のターンにもかかわらず、クロノス教諭が宣言を行う。

「私は、【魔封じの芳香】を発動するノーネ！」

【魔封じの芳香】永続罠

このカードが場に表である限り、魔法カードを手札から発動できず、魔法カードを発動するためには一旦セットし、セットしたプレイヤーのターンで次のターンからしか発動できない。

〝罠（トラップ）カード〟。主に、相手の動きを妨害するために使われるカードだ。

発動するためには一度セットしなければならず、発動条件を満たさなければいけないカードも多いが……。

一度機能すれば、勝負を傾けさせることも可能なカードたち。

引いたカードを、確認する。

【受け継がれる力】通常魔法

……っく。

思わず唇を噛みしめる。

やられた。

駄目だ、クロノス先生、ちょー強い。

手札の【融合】を……魔法カードを使うのを封じられた……！

私のセットカードは、【リビングデッドの呼び声】と【無謀な欲張り】

だ。
【リビングデッドの呼び声】永続罠
自分の墓地に置かれたモンスターを1体攻撃表示で特殊召喚する。
【無謀な欲張り】通常罠
2枚ドローする。自分の通常ドローを2回とばす。
予定なら、このターンで【エアーマン】を蘇生し、【バーストレディ】を呼ぶ。
【フレアウイングマン】を融合召喚、【無謀な欲張り】でモンスターを引き込む。
みんなで攻撃してトドメ！　なんて考えていたんだけどなぁ……。
先手を打たれちゃったら、どうしようもないや……。
……また、勝てないのかな。
俯きそうになる。
〝テキストをちゃんと読むんだ〟
ふっ、と〝彼〟の言葉が頭に浮かんだ。
〝【エアーマン】と【シャドー・ミスト】。
この2体だけでも、君の【ＨＥＲＯ】デッキは僕の【ＨＥＲＯ】デッキのポテンシャルを超えている。
君が僕に勝てないのは〟
〝君が、君のデッキを、使いこなせてないからだよ〟
〝さぁ、もう一度かかって来い！　今度は違えるなよ！〟
そうだ。プロの彼に言われたのだ。
私のデッキは、強い。
私の【ＨＥＲＯ】は……最強だ！
私はこのデッキで、一生懸命に組み上げたこのデッキで……勝つんだ！

……考えるんだ。考えるんだ。
どうやったら勝てる？このターンで【融合】はできない。
【古代の機械獣】をこのターンで倒すには……。
……【融合】を、しなければいいんだ。
私は、【フェザーマン】を攻撃表示で召喚！
そして、【リビングデッドの呼び声】を発動！【エアーマン】を蘇生します！

私のフィールドに、鳥人（フェザーマン）と、超人（エアーマン）が舞い降りた。
【Ｅ・ＨＥＲＯフェザーマン】☆３　攻撃力１０００
【Ｅ・ＨＥＲＯエアーマン】☆４　攻撃力１８００

……この世界に来て、決めたんだ。
もう、私は、私のデッキを諦めないんだって……！

戦いから逃げない少女の姿を見て、ギャラリーがざわめく。
「……あいつ、まだ諦めていないのか」
「でも、この状況からひっくり返ったところを見たことねぇぞ」

「あのカイザーですら、【融合】を封じられて敗れたコンボだぞ？」

「いや、デュエルは最後まで何が起きるかわからないからワクワクするんだ」
観客席で、もう一人の【ＨＥＲＯ】使いの少年は不敵な笑みを浮かべて呟く。
「あんたの【ＨＥＲＯ】の力を、見せてやれ」
◆　◆　◆　◆
私が思考する間、クロノス教諭はずっと黙って待っててくれた。
「……もう、逡巡するのは終わりデスーノ？」
ええ。待たせてすみません。
「よろしい。……だが、あなたは決定的なミスを犯したデスーノ」

クロノス教諭はそう言って、【フェザーマン】を指さす。
「あなたは【フェザーマン】を通常召喚してしまった。本来なら、【エアーマン】の効果で上級の【ＨＥＲＯ】をサーチして、そのまま生贄召喚に繋げるべきだったはずデスーノ」
「あの受験生、焦ってミスを……？」
「あちゃー、惜しかったな―」

観客席からちらほらと聞こえてくる声。
……違う、あなた達は何もわかってない。
だから……これを見て！
【エアーマン】が飛翔する。
そして、クロノス教諭の場に目掛けて、急降下を開始した。
目指す先は、【魔封じの芳香】がある。
「これは…!?」
クロノス教諭が息を呑む。
行きます！
【エアーマン】の第二の効果を発動！その効果により、【魔封じの芳香】を破壊します！
「マンママミーア!?」
【Ｅ・ＨＥＲＯエアーマン】☆４　効果モンスター
召喚・特殊召喚に成功した時、以下の効果のうち、一つを選択して発動できる。
・デッキから【ＨＥＲＯ】モンスター１体を手札に加える。
・このカード以外の自分の場の【ＨＥＲＯ】の数まで、場の魔法・罠を破壊できる。
【エアーマン】がそのブレードで、【魔封じの芳香】を切り裂いた。
これで私は魔法カードを発動できます！
「で、ですが！あなたの手札に融合素材が揃っていなければ……」
ええ。揃っていなければ、融合はできません。
だから私は、このカードを使います。

私は【フェザーマン】を生贄に捧げ、【受け継がれる力】を発動！
【受け継がれる力】通常魔法
自分のモンスター1体を墓地に送る。ターン終了時まで、墓地に送ったモンスターの攻撃力を、自分のモンスター1体の攻撃力に加える。
【エアーマン】
攻撃力１８００→２８００
「な！」
お願い【エアーマン】！　〝エアー・ブレード〟！
【エアーマン】の一撃が【機械獣】を切り裂く。
クロノス教諭
ＬＰ３０００→２５００
「あの受験生やるな……」
「あんなに強いのに何で１１１番なんだ？」
観客席からチラホラとそんな声が聞こえてくる。
……仕方ないじゃん。
私、【ＨＥＲＯ】以外のカードのことなんてよくわからないもん。

振りかかる鋼鉄の破片に身じろぎ一つせず、クロノス教諭は私を見据えていた。
「……ドロップ・アウト・ガール……あなたはワタシをどこまでも驚かせてくれるノーネ」
そして。
場はがら空きで、ピンチのはずなのに、不敵に笑い出す。
「ニョホホホ、しかし全然！　ワターシを倒すには足りないの―ネ！」
……これも懐かしい。ＧＸ一期の時の、二流悪役なクロノス先生だ。
懐かしいんだけど……。
ジワリと、首のあたりに嫌な感じが広がる。
……まさか、もうあれが手札に来てる？
……私は、ターンエンド。

？
ＬＰ３５００
手札１（【融合】）
【エアーマン】★４　攻撃力２８００→１８００
／【リビングデッドの呼び声】永続罠
対象：【エアーマン】
〉セットカード１枚（【無謀な欲張り】）
クロノス
手札１
モンスター無し
／【古代の機械城】永続魔法
フィールド【歯車街】
「ワタァシのタァーン！」
クロノス教諭がカードを引く。
「一つ、入学前のあなたに、特別に講義をして差し上げるの―ネ。心して聴くように！」
え、えっと急に何⁉　は、はい！
「あなたのコンボ攻撃は見事でしたーの。けれど、結局最後に物をいうのは、圧倒的攻撃力なの―ネ！」
ドローしたカードを確認することもなく、クロノス教諭は最初から引いていたそのカードをデュエルコートにセットした。
「我が最強の下僕！【古代の機械巨人（アンティーク・ギア・ゴーレム）】を召喚（しょうかーん）！」
大地が震えた。

◆　◆　◆　◆

「ちょっと、アナタ大丈夫デスーノ⁉」
……は、はい。腰が抜けただけですので。
【機械巨人】のあまりの威容にびっくりして、私は転んでしまっていた。

いや、実際ヤバイ。何これ。
でっかい。こわい。
ところどころ錆びた鈍色(にびいろ)の躯体。
私の体なんか一握りで潰してしまいそうな巨大な掌(て)。
紅く光る双眸が、兜の奥から私を睨みつけてくるような……。
……チェンジで。もっとかわいい感じのやつがいい。
【古代の機械巨人】★8　攻撃力３０００
……あー！
「な、何か？」
あ、ごめんなさいごめんなさい！あなたに何かあるというわけじゃ……。
大声を出してしまい、立ち上がるのに手を貸してくれた試験官のお兄さんを驚かせてしまった。
改めてクロノス教諭に向き直る。
センセー、それズルですよ！
「な、何の事なの―ネ」
だって、レベルが7以上のモンスターって、生贄が2体必要ですよね！【歯車街】があっても、生贄が1体必要ですよ！
今どうやって【機械巨人】出したんですか!?
っていうか本当にこわいから、こんなの出さないでくださいよ！訴えますよ!?
「ヒドい言いがかりなの―ネ!?」
クロノス教諭が、墓地のカードポケットから1枚のカードを取り出す。
「私はこのカードを生贄に捧げることで【機械巨人】を召喚したの―ネ！」
……【古代の機械城】？ふむふむ。
【古代の機械城】永続魔法
場の【古代の機械】モンスターの攻撃力は３００ポイントアップする。モンスターが召喚されるたびにこのカードにカウンターを1つ

乗せる。このカードにカウンターが乗っている数だけ、このカードは【古代の機械】モンスターを召喚するときの生贄の代わりになる。
……あ、第二の効果強い。っていうかこんなこと書いてあったのか。
「嫌疑は晴らしたノーネ？」
あ、はい……ごめんなさい。
「よろしい。ならば容赦はしないの―ネ！」
……え？
気がついたら、既に目前まで【機械巨人】の腕が迫っていた。
「【機械巨人】の攻撃！〝アルティメット・パウンド〟！」
……ちょっ！
【エアーマン】が再び私を庇うように立ちふさがる。
そして、頭上から振り下ろされる【機械巨人】の一撃を、受け止めた。
でも耐え切れず、【機械巨人】の掌に押しつぶされる【エアーマン】。
地面と【機械巨人】の拳の間から、モンスターが破壊される時の爆散音がした。
？
ＬＰ３５００→２３００
ごめんね【エアーマン】……守ってあげられなくて。
私が悔しい思いをしながらクロノス教諭の方を見ると、何故かクロノス教諭も悔しそうな顔をしていた。
「ワターシとしたことが、気が逸ったノーネ……」
クロノス教諭は自分の手札を眺めて、そんなことを呟いている。
……一体何があったんだろう？
「ワターシはカードをセット。ターンエンドなの―ネ」
フィールド：【歯車街】
クロノス教諭
ＬＰ２５００
手札０
【古代の機械巨人】☆８　攻撃力３０００

／　セットカード1枚
？
ＬＰ２３００
手札１（【融合】）
　モンスター無し
／　セットカード1枚（【無謀な欲張り】）
私のターン！ドロー！
ドローカードは、【Ｅ・ＨＥＲＯバーストレディ】。
【バーストレディ】では【機械巨人】には勝てない。
私の手札の中には、目の前の巨人を倒す手段は無い。
……なら、使いどきは今！
私は、【無謀な欲張り】を発動！その効果で２枚ドローします！
「……デメリット付きの手札増強カード、ナノーネ」
険しい目をするクロノス教諭。
ドローカードは……。
【Ｅ・ＨＥＲＯワイルドマン】☆４
【Ｈ（エイチ）ーヒートハート】通常魔法
……うん。デッキは私に応えてくれた。
私は……このデッキの切り札で、クロノス先生に勝つんだ！
私は【融合】を発動！その効果により、融合召喚を行います！
【融合】通常魔法
一組の決められたモンスターを融合する。
〝融合召喚〟。
【融合】の魔法カードにより、一組の決められたモンスターをさらに強力なモンスター1体へと変じさせる強力な召喚方法。
手札に【融合】のカードと2体以上の条件のあったモンスターが揃わなければいけないため、その難度はかなり高い。
だけど、この方法によって出されるモンスターたちは、そのプレイヤーにとって正真正銘の〝切り札〟だ。
会場が、シンと静まり返る。
――――手札の【Ｅ・ＨＥＲＯバーストレディ】と【Ｅ・ＨＥＲ

Ｏワイルドマン】で融合召喚！
【バーストレディ】☆３　炎　戦士族　通常モンスター
【ワイルドマン】☆４　地　戦士族　効果モンスター
――――――　来て！その鋼鉄の両腕で、眼前の敵を砕き沈めよ！
【Ｅ・ＨＥＲＯガイア】！
大地が揺れる。【機械巨人】の時よりも、さらに大きく。
今度は、転ばない。
地面を割って、巨大な〝ヒーロー〟がその姿を表した。
【Ｅ・ＨＥＲＯガイア】★６　融合モンスター
【Ｅ・ＨＥＲＯ】モンスター　＋　地属性モンスター
攻撃力２２００
姿を表したのは、鋼の鎧を纏い、大地（ガイア）そのものの名を冠した巨人。
「ワーオ……」
自身の下僕に勝るとも劣らない巨躯に、感嘆の声を漏らすクロノス教諭。
巨人と巨人が、フィールドで向き合った。
◆　◆　◆　◆
「です～が、融合召喚しても攻撃力２２００。私の【古代の機械巨人】には及びませーンノ」
【Ｅ・ＨＥＲＯガイア】　攻撃力２２００
【古代の機械巨人】　攻撃力３０００
クロノス教諭が吐き出したのは、どこかで聞いたことのあるセリフ。
多分、十代との戦いで【フレイムウイングマン】に対して言ったやつそのままだ。
違うのは、そこに嘲りの色がないこと。
「あの１１１番、次は何を見せてくれると思う？」
「なんかカッケェ……」
「「頑張れ！　１１１番！」」
「さぁ、グズグズしないでかかってくるノーネ！」
〝ヒーロー〟に対する期待が込められていること。

行きます！
【ガイア】の効果を発動！
【ガイア】は召喚に成功した時、相手モンスター１体の攻撃力の半分をターン終了時まで……奪い取る！
【Ｅ・ＨＥＲＯガイア】★６　融合モンスター・効果
このモンスターは融合召喚でしか召喚できない。
召喚された時、ターン終了時まで相手モンスター１体の攻撃力を半分ダウンさせ、その数値だけこのモンスターの攻撃力に加える。
【古代の機械巨人】攻撃力３０００→１５００
【Ｅ・ＨＥＲＯガイア】攻撃力２２００→３７００
「……ック！」
クロノス教諭が、ピクッと眉を動かす。
そして……【Ｈ－ヒートハート】を発動！
【Ｈ－ヒートハート】通常魔法
自分の【Ｅ・ＨＥＲＯ】モンスター１体はターン終了時まで攻撃力が５００アップし、守備表示モンスターを攻撃したとき、攻撃力が守備力を超えている分だけ、相手に戦闘ダメージを与える。
【Ｅ・ＨＥＲＯガイア】攻撃力３７００→４２００

？
ＬＰ２３００
手札０
【ガイア】☆６　攻撃力４２００
／　魔法・罠カード無し
クロノス
ＬＰ２５００
手札０
【機械巨人】★８　攻撃力１５００
／　セットカード１枚
「この攻撃が通ったら……」

「２７００のダメージで、クロノス教諭が負ける？」

この攻撃で……私の勝ちだ！

【ガイア】の攻撃！　〝コンチネンタル・ハンマー〟！

【ガイア】の両腕が、【機械巨人】を押しつぶそうとして前方に繰り出された。

【機械巨人】の後ろで、クロノス先生が〝困った子猫ちゃんだ〟風に肩をすくめている姿が目に写った。……あれ？　先生、何かヨユー？

「ヤレヤレ、なのーネ」

「リバースカードオープン！【リミッター解除】！」

……え？

【リミッター解除】速攻魔法

自分の場の機械族の攻撃力を倍にする。この効果を受けたモンスターはターン終了時に破壊される。

クロノス教諭が発動したのは、機械族デッキの切り札とも言える魔法カード。

まさか引いてたなんて……！

【機械巨人】★８　地　機械族　攻撃力１５００→３０００

力を取り戻した【機械巨人】が【ガイア】を向かえ撃つように腕を繰り出した。

だが、【ガイア】には敵わず粉砕される。

しかし……。

クロノス

ＬＰ２５００→１３００

クロノス教諭にトドメを刺しそこねた……！

……スゴい、これが。

これが、アカデミア実技指導最高責任者の実力！

……絶対に勝ったと思ったのに！　私、今、スゴくワクワクしてる

！

「……今褒められても素直に喜べないのーネ」

何故か苦笑を浮かべるクロノス教諭。

「……ねぇ、亮」

「あぁ、クロノス教諭は前のターンで勝つことも可能だった」

デュエルフィールドを二階席から見ていた天上院明日香と丸藤亮は思案する。

前のターン、クロノス教諭は【エアーマン】に攻撃する際に【リミッター解除】を使うべきだった。

そうすれば、４２００のダメージで１１１番の少女を倒せていたはずだ。

見る限りで、アカデミア生のほとんどがそれに気づいている。

〝クロノス教諭が、プレイングミスをして、受験生に追い詰められている〟という事実に。

「結局、彼女がここまで善戦できたのもまぐれということになるのかしら」

「いや、違うさ。勝負にたられば は無い」

アカデミアのカイザーと呼ばれる男は少女を見つめながら言う。

「彼女の戦う姿が、流れを引き込んだんだ」

結局、私にはそれ以上何もできなかった。

私はターンを終了します。

この時、【ガイア】の攻撃力が元に戻ります。

【ガイア】攻撃力４２００→２２００

フィールド：【歯車街】

？

ＬＰ２３００

手札０

【ガイア】☆６　攻撃力２２００

／　魔法・罠カード無し
クロノス
ＬＰ１３００
手札０
　モンスター無し
／　魔法罠無し

トドメは刺しきれなかったけど、追いつめはした。
次のターン、何を引かれたって……。
クロノス教諭の方を見る。
追い詰められてるはずなのに、クロノス教諭は全く動じていなかった。
……あれ？
「特別に、もう一つ講義をして差し上げましょう」
え、は、はい。よろしくお願いします。
「ワターシほどの相手と戦うときは……相手にターンを渡すときは慎重にならなければなりませーん。
ターンを渡せば渡すほど……逆転されるリスクを冒すことになるのですかーら」
ぎゃ、逆転？
で、でも。クロノス先生の手札にも場にもカードなんて……。
「一流のデュエリストの大前提……それを今からお見せするノーネ！」
――――ドロー！
気のせいか。
私の目には、ドローするときのクロノス教諭の手が、カードが、光って見えた気がした。
……クロノス教諭は何を引いたの？
「……信じてたのーネ。ワターシは【サイクロン】を発動！」
【サイクロン】速攻魔法
場の魔法・罠カードを１枚破壊する。

観衆が、ざわめく。
【サイクロン】？で、でも、私の場にも、先生の場にも魔法も罠も無いのに？
「魔法カードなら在るの―ネ」
……え？
クロノス教諭がデュエルコートの上部のスイッチを押す。
カードポケットが開き、そこから1枚のカードが取り出される。
ギャラリーの息を呑む音が聞こえた気がした。
「私が破壊するのは、フィールド魔法（マジック）、【歯車街】！」
一陣の風が、フィールドを駆け抜けていった。
ソリッドビジョンだということを忘れて、慌ててスカートの裾を押さえつける。
風が吹いたあとには、もう歯車の一つも残っていない、ただのデュエルフィールドがそこに広がっていた。
「クロノス教諭は何を……？」
「自分から【古代の機械】の補助カードを破壊した……？」
「ミスか？いや、クロノス先生に限って……（今さっきしたばっかだな）」
我に帰って気がつく。
クロノス先生、何で自分から【歯車街】を……？
《「メインフェイズ2に移行するノーネ！【押収】を発動！」》
《「ワターシが選択するのは、【サイクロン】！」》
わざわざ、私の手札から捨てさせまでした【サイクロン】で破壊なんて……？
……ミ、ミスですよね？
おずおずと問いかけると……。

クロノス教諭は、満面の笑みを浮かべていた。

「フフン、所詮は、ドロップ・アウト・ガールなの―ネ」

「覚えておくといいの―ネ……ワターシの辞書に、ＭＩ（失）ＳＴＡＫＥ（敗）の文字はないの―ネ」

クロノス教諭のその言葉の直後。

今日、三度目の地揺れとともに、巨竜が姿を現した。

「ねえ、亮」

「ああ、そうだな」

明日香の問いかけに、カイザーと呼ばれる男は答える。

「ＭＩＳＴＡＫＥの文字が無い、は嘘だな。プレイングミスはしてた」

ヤレヤレ、と言った表情で言葉を続ける。

「クロノス教諭は変なところで調子に乗るところを除けば、理想の教師なんだが……」

◆　◆　◆　◆

【古代の機械巨竜（アンティーク・ギア・ガジェルドラゴン）】☆８　攻撃力３０００

クロノス教諭が従えているのは、機械仕掛けの巨竜。

……嘘。

……どうやって出したんですか？

「【歯車街】は破壊された時、【古代の機械】の下僕を場に残していく効果を持っているノーネ」

【歯車街】フィールド魔法

このカードが場に表であるかぎり、【古代の機械】モンスターの召喚に必要な生贄を１体減らしても良い。このカードが破壊された時、デッキ・手札・墓地から【古代の機械】モンスター１体を特殊召喚することができる。

……第二の、効果。

「この【機械巨竜】には、貫通効果こそ無いものの……あなたに引導を渡すには十分ナノーネ」

？

ＬＰ２３００
手札０
【Ｅ・ＨＥＲＯガイア】☆６　攻撃力２２００
／　魔法・罠カード無し
クロノス
ＬＰ１３００
手札０
【古代の機械巨竜】☆８　攻撃力３０００
／　魔法・罠カード無し
お互いの、場にも手札にも、カードは１枚だけ。
ここが、死力をかけた最後の戦いだった。

「【機械巨竜】の攻撃！」
……迎え撃って、【ガイア】！

フィールドの中央でぶつかり合う２体のモンスター。
でも、力の差は明白だった。
拮抗していたのは、ほんの数瞬。【機械巨竜】がその長い尾で【ガイア】を縛り付ける。
抵抗虚しく、【ガイア】は光のカケラとなって爆散した。

？　ＬＰ２３００→１５００
……ごめん、また駄目だった。
クロノス先生、ちょー強い。
……結構、喰らいついたと思ったんだけどな。
私の、ターン。

私のディスクは、ドローカードを吐き出してはくれなかった。
……うん、わかってた。
【無謀な欲張り】通常罠
２枚ドローする。自分の通常ドローを２回とばす。

【無謀な欲張り】のデメリット。私は、このターンと次のターン、ターンの始めのドローが、できない。
クロノス教諭が静かに語りかけてくる。
「……一流のデュエリストは、たった1枚のドローで逆転するノーネ」
「その可能性（ドロー）を捨てて戦ったあなたは、前のターンで私を倒しきるべきだったのーネ」
「……講義を終わりますーノ。ワタシのターン」
？
ＬＰ１５００
手札０
モンスター無し
／　魔法・罠カード無し
クロノス
ＬＰ１３００
手札１
【古代の機械巨竜】☆８　攻撃力３０００
／　魔法・罠カード無し
【機械巨竜】が私へと向かってくる。
私の場に、私を庇ってくれるモンスターは、もういない。
「【機械巨竜】で、アナタに直接攻撃！」
……きゃあ！
ソリッドビジョンとわかっていても、こわいものはこわい。
反射的に頭を抱えてうずくまっちゃったけど、【機械巨竜】の映像は私の体をすり抜けていって……。
？　ＬＰ１５００→０
ＷＩＮＥＲ　クロノス
クロノス教諭の勝利で、デュエルは幕を閉じた。
◆　◆　◆　◆
そのままペタン、と尻もちを着く。
……私、負けちゃったのか。

……クロノス教諭が強いのもわかっているけど。
……私が未熟なのもわかっているけど。
……勝ちたかったな。……懐かしかったな。……悔しいな。……楽しかったな。
……入りたかったな、デュエルアカデミア。
いろいろな感情が胸の中で渦を巻く。
自己嫌悪とか、反省とか、これ以上、エド君に迷惑をかけられないし、身の振り方をどうしようとかぐるぐる考えていると、ツカツカとクロノス教諭がこちらに歩み寄ってくる。
スッと、手を差し伸べてくれた。
「いつまで呆けているノーネ」
……先生には関係のないことですよ。……私は不合格なんだから。
……少し刺々しくなるのは許して欲しい。全力で戦って負けたら、やっぱ悔しいのだ。
「関係なら有るの―ネ。
あなたは私の生徒になるのだから、生徒の相談に教師が応じるのは、当たり前なの―ネ」

……へ？
そこで私はやっと気がつく。
会場が、拍手の音で満たされていることに。
「素晴らしい試合（GOOD GAME）でしたーノ。
あれだけの実力を見せられれば、勝敗など小さなことですーノ」

……私、負けたんですよ？
「ノン、ノ」
クロノス教諭が指を振る。
「教師に生徒が敵わないのは至って普通のことですーノ。
完成された生徒ばかりでは、教師の仕事がなくなってしまうデスーノ」

その長身を屈(かが)め、私の手を取り、私の目を覗き込みながらクロノス教諭は言ってくれた。

「ようこそ、デュエルアカデミアに」

……ック、ク、クロノスせんせー！

う……ウワァァァン！

ブワッ、と涙が溢れてくるのが自分でもわかった。

自分では、とてもじゃないが止めきれない。

「だ、抱きつくのをやめるノーネ！　皆が見てるのーネ！

……鼻水と涙で汚れルーノ！　ちょ、離すの～ネー！」

こうして、私はデュエルアカデミアへと入学する。

そこで、何を見、何を為すのか。

それは私にはまだわからないことだ。

◆　◆　◆　◆

「いやぁ、受験生の少女を泣かせるなんて、クロノス先生もすっかり悪い大人ですにゃー」

「人聞きの悪いことを言わないで欲しいノーネ。

あれは彼女が勝手に(かってー)……」
「それはさておきですにゃー。
スゴく盛り上がってたけど、彼女が何を言ってるかわかったんですにゃー？」
「……何を言ってるんデスーノ？
彼女はあんなに饒舌に喋っていたノーに」
「……え？」
「え、ってなんですーノ。
彼女はかなりおしゃべりでした～の。
じゃないと私もあんなに熱くならないですーノ」
「いやいやいや！　全然！
転んで起き上がるときぐらいしか喋ってなかったですにゃ―！」
「？　そんなわけないの―ネ。からかうのはやめて欲しいノーネ」

「クロノス先生！　校長から連絡が入ってます！　至急確認を！」
「大徳寺先生、どうもまだ仕事が残っているようなので、失礼させてもらうの―ネ」
「あ、そ、そうですにゃ―」

「……いやいや」
「いや、絶対喋ってなかったですにゃー。
……十代君に負けたショックで、クロノス先生、おかしくなってしまったんですかにゃ―？」

VS万丈目

「クンクン、こっちにデュエルしてる奴がいるぞ！」
「どうしてそんなことがわかるのさ」
「臭うんだよ！　間違いない、デュエルの匂いだ！」
赤いジャケットを羽織った少年が二人、廊下を駆けて行く。
「うおー！　すげー！」
「最新式のデュエルフィールド……」
二人が辿り着いたのはアカデミアの中心部に位置するスタジアム。
アカデミアでも最高設備のデュエルフィールドがある場所だった。
「スゲー！　よし翔！　デュエルしようぜ！」
「え、いいのかなぁ」
快活な印象を見る者に与える茶髪の少年が、髪の青い丸ぶち眼鏡の少年をデュエルに誘う。気弱な性格をしている眼鏡の少年はその提案に引け腰になりながら、
（まぁでも、デュエルの匂いっていうのはやっぱり適当なことを言ってたんだな……）
頭の片隅でそんなことを考えていた。
デュエルフィールドの上に人影はなかった。直前まで誰かが戦っていたなら廊下までその音も聞こえているはず。そんな気配もここに来る途中には感じられず。デュエリストなら「あっちでデュエルがあってる」なんて言われたら釣られるに決まっている。
（きっと兄貴は自分がデュエルしたくて、僕をここに誘い出すために〝デュエルの匂い〟なんて適当な事を口走ったんだろうな……）
それで釣られる自分も自分だなと眼鏡の少年は苦笑を漏らす。
（釣られちゃったのは癪だけど、僕もデュエリストだ、断る手はないや）
この時の眼鏡の少年に知る由はないが、彼が兄貴と慕う少年　〝遊城十代〟　の嗅覚は本物だ。
数分前まで、確かにこの場所ではデュエルが行われていた。

「お前の切り札は俺のフィールドに居るぜ。
はたして下級モンスター1体と手札1枚で何ができる？」
万丈目君の場には私からコントロールを奪った【ガイア】がいる。
対して、私の場にいるのは【エアーマン】が一体のみ。
手札は……今からドローする1枚だけ。
残りライフはわずか。
〝融合〟をすることは実質的に不可能。
でも融合なしに【ガイア】を倒すのは至難を極める今の状況で。
ドロー！
私は迷わずデッキの上からカードを引く。
気合を入れれば都合のいいカードを引けるわけじゃない。
ピンチだったら都合のいいカードを引けるわけじゃない。
でもだからと言って都合の良いカードを引けないとも限らない。
それがデュエルの醍醐味だから。
……このカードって。
きっと神様がズルさせてくれて私が持ってる　〝この世界には本来存在しない〟　カードの1枚。
1体の【ＨＥＲＯ】で融合を可能にする、常識はずれの　〝融合〟魔法カードを私は引き込んでいた。
◆　◆　◆　◆
1時間前
◆　◆　◆　◆
来た。ちょー来た。
……私の【ＨＥＲＯ】アカデミア。
意味の分からないことを口走っているかもしれない。
許して欲しい。嬉しくてテンションが上がっているのだ。
今私が立っているこの場所は太平洋上の孤島。デュエル・アカデミアの存在するあの孤島である。私の目前にはドーム状の屋根を持つデュエル・アカデミアの校舎がある。

全ての問題が片付いたわけではないけど……、とりあえず当面の社会的身分は保証されたようなものだし、何より憧れのアニメの主人公と同じ学校に通うというシチュエーションを楽しまない手はない。
とりあえず同じ【ＨＥＲＯ】使いとして十代と親交を深めたい。
彼は私のデュエルを見てくれてただろうか？
かっこ良く戦えてたかな？
ずっとファンでしたって言って引かれないかな？
まず、「デュエル見ました！　カッコ良かったです！」って言ってから、それから、そんなことを思案しながら中庭を散策する。

「おう、２番！」
「おや？　入試のときの１番くんじゃないか」
「本当は１番じゃなくて１１０番なんだけどね」

そして、少し先に十代と翔くん、そして三沢君が何事かを話してるのを見つけた。
……いきなりチャンス到来。
落ち着け私。クールダウンクールダウン。
「ずっとファンでした」は十代からすれば意味不明だし、「入試のときのデュエル、カッコ良かったです！」は十代がカッコイイのは当たり前だから……。まだ私と十代は面識がないから、名前を知ってるのもおかしいから名前呼びも出来ないし……。
決めた。
「入学試験で【ＨＥＲＯ】を使ってましたよね！」って話しかけよう。
それなら不自然じゃないし。
意を決して踏み出す。
ねぇねぇ、そこのあなた。入試で【ＨＥＲＯ】を使ってましたよね？
意気揚々と十代に話しかけようとして……
「おいお前！　入学試験で【ＨＥＲＯ】を使っていた奴だな？」
後ろから肩を掴まれた。

えっ？
十代はもうどこかに行こうと歩き出していて、声をかけそびれてしまう。翔くんがその背中を追っ掛けていくのが見えた。
あっ、ああ……せっかくのチャンスが。
……正直初対面の人を後ろから呼び止めるのって失礼なことだと思う。
チャンスをフイにしてしまった怒りも込めて文句を言ってやろうと、振り向く。
「まずは合格おめでとうというべきかな？　ようこそデュエルアカデミアへ」
そして私を引き止めた声の正体に、文句が喉元に引っ込んでしまった。
私の後ろに立っていたのは3人の男子生徒。
「どうした編入生？　万丈目さんがお声をかけているんだぞ？
何か言ったらどうだ」
「だんまりとは失礼なやつだな。
ここにおわすのは、一年でも最強の、未来のデュエルキングと名高い万丈目さんだぞ！」
「ビー・クワイエットだ諸君。
彼女はまだここに来たばかりなんだ。
こちらの事情の押し付けは勝手が過ぎるというものだぞ」
彼は取り巻きの少年たちをたしなめ、私へスッと手を差し伸べてきた。
「連れの粗相は大目に見てくれ。普段は気のいい奴らなんだ」
私を呼び止めたのは、オベリスクブルーのコートに身を包んだツンツンとした前髪と鋭い眼差しを持った少年だった。
彼の名前は万丈目準。十代のライバルキャラで……多分ＧＸにおける最強のデュエリストの一人。
万丈目君は口元に柔和な笑みを貼り付けていたけど……その目は全然笑っていなかった。

◆　◆　◆　◆

何故か私は万丈目君と地面に座り込んで入試のデュエルの〝反省会〟をしていた。

「ずっと引っかかっていた。1ターン早く【無謀な欲張り】を使っていればクロノス教諭を倒せていたんじゃないのか？」

え、えっと、計算してみるね……。

私の2ターン目。クロノス先生のLPは3000だった。

もし私が1ターン早く【無謀な欲張り】を発動していたらどうなっていたんだろう？

私が最後に引き込んでいたのは【Hーヒートハート】と【ワイルドマン】の2枚。

その内のどちらかが手札に来なかったはずで。

でもそのときはクロノス先生の場には【古代の機械巨人（アンティーク・ギアゴーレム）】も居なかった。

はるかに御しやすい盤面だったことも事実だ。

私と万丈目君は地面にあの日のデュエル内容を木の枝で描き出して、デュエル内容をふりかえる。

私は入試のデュエル中、最後のターンで全ての手札を使い切っていた。つまりは観戦していた万丈目君も私の戦略を詳らかに追うことができるわけで。

万丈目君は私にカードをドローした順番を思い出すように促し、地面に樹の枝で入試のデュエル内容と私の手札内容についてパズルを解いていく。

「つまり融合デッキに【フレイムウイングマン】が入っているなら、最後にドローした【H―ヒートハート】【ワイルドマン】のどちらかが欠けていても十分にクロノス教諭のライフを削りきれていたはずだ。

もちろん【フレイムウイングマン】は持っているな？」

持ってるけど、どうしてわかるの？

「得意気に【フェザーマン】をサーチしていただろ。

どんなに鈍くてもあれを見て気づかないってことはまずないぜ」

……あ。
そういうところからも戦略ってばれるんだ。
「１１０番とのデュエルの直後だったからな。
【融合】主体ってのはさらにわかりやすかったぜ。
……俺なら、いや、この話は長くなるから止しとくか」
「勝負にたらればはない。
結局のところ、その決断に踏み切るだけの判断材料が不足していたことは確かだ。
ここに書いたことは結果論も結果論。だけどな」
万丈目君が地面に木の枝を置き、顔をあげる。
口角を吊り上げながら万丈目くんは言った。
「ブルーの間ではこの話題で持ちきりだ。〝クロノス教諭を倒した１１０番〟と〝クロノス教諭を苦しめた１１１番〟ってな。
でもこの程度のことにも気付いてなかったとなると、あのデュエルも結局はまぐれで大したことは無かったようだな」
……仰るとおりです。返す言葉がない。
静かに自分のダメさ加減に落ち込んでいて……私は万丈目君の期待の色のこもった視線に気付かなかった。
しばらくして、万丈目君は諦めたようにフンと息を一つ吐くと制服についた土を払いながら立ち上がる。
「この調子だと１１０番の方も大したこと無さそうだな。
待たせたな、行くぞお前ら！」
万丈目君は踵を返して彼の取り巻きの人達のところに戻って行こうとする。

そして２歩も進まないうちにピタリと歩を止めた。
「……何の真似だ？」
万丈目君の袖を掴んで離さない私に、万丈目君が疑問の声を投げかける。
「人を後ろから掴むのは失礼だぜ？　寛容な俺だからいいが、他の誰にもこんなことをするのは」

訂正して。
「……は？　ああ、いや、そうだな俺も後ろから呼び止めたのにこの言い方はないか。
じゃあお相子ってことで」
違う。そっちじゃない。
十代が……１１０番の彼が大したことないって言ったことを訂正して！
変な子に思われるかもしれない。そんなことを危惧する冷静な自分も頭の片隅にはいた。
だけどこの激情をどうしても抑えつけることができなかった。
私は別に悪役チックな万丈目君のことが嫌いじゃない。むしろ好きなくらいだ。
でも、そんな万丈目君でも十代のことを貶すことは許さない！
万丈目君は一瞬驚いた表情になって……そしてすぐに悪役チックな笑顔でそのセリフを吐いた。
「嫌やだね。奴は落ちこぼれのオシリスレッドだ。アカデミアの教師達もまぐれだと判断したからそこに入れたんだろ。どこにも訂正する要素なんて無いぜ」
「どうしてもこの言葉を曲げさせたいならデュエルで決着をつけても構わないぜ？」
……あったま来た。
やるよ、私。そのデュエル受けるよ。
◆　◆　◆　◆
アカデミア中央のデュエルフィールド。そこで私と万丈目君は対峙していた。
「アンティの内容は〝負けたほうが勝った方の言うことを何でも聞く〟でいいんだな？」
いいよ。絶対勝って、さっきの言葉を訂正させる。
「おお、怖い怖い」
万丈目君は芝居がかった調子でそんなセリフを口にする。
「今謝っとけば許してやるぜ？　お前じゃ俺には勝てないと思うけど

な」
……デュエル。
返事代わりにデュエルディスク（万丈目君の取り巻きの人から借りた）を展開する。
「クククッ……デュエル！」
何が可笑しいのかわからないけど、万丈目君が笑いながらデュエルディスクを展開した。
ピーッ、という音。お互いのディスクがリンクし、デュエルが開始した合図だ。
先行は私！　ドロー！
手札を見る。今可能な動きは……。
……。
私は【フェザーマン】を守備表示で召喚！　さらにカードを1枚セットしてターンエンド！
？
手札４
ＬＰ４０００
【Ｅ・ＨＥＲＯフェザーマン】☆３　守備力６００
／　セットカード１枚
私の場に【フェザーマン】が膝を折って現れる。
モンスターの召喚、ほぼそれだけの操作でターンが回ってきたものだから万丈目君が訝しげな目でこちらを見てきた。
「威勢の割に慎重だな。手札事故でも起こしたか？」
ち、違うし。
万丈目君の探りに、思わず声が震えてしまった。
「まぁいい。俺のターン！　ドロー！」
万丈目君がカードを引く。
そして引いたカードを見てまた意地が悪そうな笑みを浮かべた。
「コイツはおあつらえ向きのカードが来たようだな」
万丈目君は引いたカードを手札に加えて、別の手札に手をかける。
「俺は【地獄戦士（ヘル・ソルジャー）】を召喚する！

バトルだ！　やつの【フェザーマン】を蹴散らせ！」
【地獄戦士】☆４　攻撃力１２００
　万丈目君が手にかけたカードをデュエルディスクに置くと、いかにも悪そうな戦士が万丈目君の場（フィールド）に現れる。現れるや否や、その戦士は【フェザーマン】に襲いかかってきて……【フェザーマン】は無抵抗のままにその戦士に切り伏せられてしまった。
　爆散音と共に【フェザーマン】が消滅する。
　召喚にも攻撃にもカードの発動を宣言しない私に、万丈目君は呆れたような声を出して。
「伏せカードも迎撃カードじゃない。やっぱり手札事故なん……」
　そしてしゃべるのを途中でやめてしまう。
　ヴーン…ヴーン……というサイレンが鳴り出したのだ。
　万丈目君は視線を彷徨わせ音の出所を探り……そして私の伏せカードに注目した。
「ちっ、発動条件を満たしたか」
　うん。私は【フェザーマン】が破壊された瞬間にこのカードを発動したの。
【ヒーロー・シグナル】のカードを。
【ヒーロー・シグナル】通常罠
　自分の場のモンスターが戦闘で破壊され墓地に送れらた時に発動可能。手札かデッキからレベル４以下の【Ｅ・ＨＥＲＯ】モンスター一体を特殊召喚する。
【フェザーマン】の叫びはシグナルとなって私のデッキのモンスターを呼び覚ます！
　来て、【エアーマン】！
　〝ハァッ！〟
　掛け声を上げ、私の場に軽やかに【エアーマン】が降り立つ。
【Ｅ・ＨＥＲＯエアーマン】☆４　攻撃力１８００
　その効果で私は手札に【ワイルドマン】をサーチ！
【Ｅ・ＨＥＲＯワイルドマン】☆４　効果モンスター
？

ＬＰ４０００
手札５
【Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）エアーマン】☆４　攻撃力１８００
万丈目
ＬＰ４０００
手札５
【地獄戦士】☆４　攻撃力１２００

「俺の攻撃を利用してエースモンスターを呼び出すとはあじなことを……」
万丈目君は軽く顔をしかめながら小声で何かをつぶやく。
「やはり【ＨＥＲＯ】はデッキに……が多いな。サーチ対策が……」
……？　どうしたの万丈目君。まだターン終わってないよ。
「ああスマナイ。メインフェイズ２に移り、俺はこのカードを発動する」
万丈目君が発動したカードを見て、今度は思わず私が顔を顰めてしまった。
【押収】通常魔法
「サーチをしていい気になってたかもしれないけどな。
使われる前にその手を潰してしまえばどうということはない」
万丈目君がこめかみのあたりを指でトントン、と叩く。
「オベリスクブルーともなると運には頼らない。
頭（ここ）でデュエルをするのさ」
……くっ、ちょっとカッコイイと思ってしまった。不覚。
万丈目君が私の手札を覗き込み……そして少し吹き出す。
「クッ、アハハハハ！　やはり事故だったじゃないか！」
……別に笑わなくたって。
【Ｅ・ＨＥＲＯワイルドマン】
【Ｅ・ＨＥＲＯバーストレディ】
【Ｅ・ＨＥＲＯネクロダークマン】

【受け継がれる力】
【Ｈ－ヒートハート】
　私の手札はモンスターを展開する手段に欠けていたため、【サイクロン】で【ヒーロー・シグナル】を発動前に破壊されでもしていたらジリ貧になるのが目に見えていた。【融合】さえ引ければ……って思ったけど、それまで場をがら空きにするわけにもいかず、泣く泣く【フェザーマン】を壁としたのだ。
「今手札に加えた【ワイルドマン】を捨てろ！」
　うぐっ。ダメだ、けっこうその手は効く。ごめんね、【ワイルドマン】。
　万丈目君の指示に従い【ワイルドマン】を墓地に置く。
「俺はカードを3枚セット。ターンを終了する」
　万丈目君の場に伏せカードが一瞬現れて、空に掻き消えた。
　万丈目
　ＬＰ３０００
　手札１
　【地獄戦士】☆４　攻撃力１２００
　／　セットカード３枚
　？
　ＬＰ４０００
　手札４
　【Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）エアーマン】★４　攻撃力１８００
　／　魔法罠カード無し

　私のターンが回ってきた。深呼吸をする。
　大丈夫だ。まだ全然取り返せる。
【ガイア】を出せるかは運任せになっちゃったけど……万丈目君の場にいるのは攻撃力１２００の【地獄戦士】１体。私の場には【エアーマン】がいて、さらにこのターンの召喚で追撃をかければ追い詰められるのは万丈目君のはず。

デッキに手をかける。
「忘れるなよ。このデュエルで負けたら相手の言いなりだからな」
万丈目君が楽しげにその言葉を口にした。
……考えてみたら私とんでもない約束をしちゃった？
い、いや負けなければいいだけの話だし！
ドロー！
引いたカードを確認する。
……うん、大丈夫。戦略では万丈目君に敵わないかもしれない。
でも、運は私の味方をしてくれている。
私は【天使の施し】を発動！
【天使の施し】　通常魔法
カードを３枚引き手札から２枚捨てる。
「ちっ、ついてはいるようだな」
万丈目君の舌打ちを尻目にカードをドローする。
カードを捨てて、万丈目君を見据えた。
万丈目君、このターンで終わらせるね。
「へぇ、いいぜ。かかって来い」
うん、万丈目君も約束のこと忘れないでね。
私は【融合】を発動！　手札の【バーストレディ】と【クレイマン】で融合召喚！
【Ｅ・ＨＥＲＯバーストレディ】★３　炎　戦士族　通常モンスター
【Ｅ・ＨＥＲＯクレイマン】★４　地　戦士族　通常モンスター
来て！　【ガイア】！
【Ｅ・ＨＥＲＯガイア】★６　融合モンスター
【Ｅ・ＨＥＲＯ】モンスター　＋　地属性モンスター
攻撃力２２００
地面を揺るがし、鋼鉄の巨人がその姿を現す。
【ガイア】と【エアーマン】が場に揃えばエド君ですら倒せるのだ。
今の私に怖いものなど存在しない。
【ガイア】の効果で【地獄戦士】の攻撃力を吸収！
そしてバトル！

勝つ！　そして絶対あの言葉を取り消させるんだ！
「……やはり外野で見てるのと直接対峙するのとでは違うな。
ビリビリ来やがるぜ」
勇む私と【ガイア】に怖じることなく、万丈目君は私のことを正面から睨みつけてくる。
「かかって来いよ編入生。格の違いを教えてやる」
◆　◆　◆　◆
？
ＬＰ４０００
手札２
【エアーマン】☆４　攻撃力１８００
【ガイア】☆６　攻撃力２８００
／　魔法罠カード無し
万丈目
ＬＰ３０００
手札１
【地獄戦士】☆４　攻撃力６００
／　セットカード３枚

私の場には【ガイア】が鎮座している。
私の手札の中でも最高の瞬間火力を誇るモンスター。
それに加えてエースモンスターの【エアーマン】もいる。
盤石と言って差し支えない盤面だ。
対して万丈目君の場にいるのは弱体化した【地獄戦士】のみ。
今の私には負ける要素が無い！
【ガイア】の攻撃！　【地獄戦士】を撃破！
私の宣言とともに【ガイア】がその腕を振り上げる。
そして驚くほどあっさりと【地獄戦士】を粉砕した。
万丈目　ＬＰ３０００→８００
【地獄戦士】の爆砕音と共にソリッドビジョンの土煙が上がる。
攻撃反応系の罠があったならこのタイミングで使っていたはず。

あとは【エアーマン】の直接攻撃で……。
勝利を確信して気を抜いた瞬間。
「お前も道連れになってもらうぜ」
土煙の向こうから万丈目君がそう言ったのが聞こえて。
クルクルクルと剣が回転しながら目の前に落ちて来て、床に突き刺さった。
？　ＬＰ４０００→１８００
「【地獄戦士】は自分が受けたダメージを相手にも与えるのさ」
【地獄戦士】☆４　攻撃力１２００　効果モンスター
このモンスターが相手の攻撃により破壊された時、そのダメージを相手にも与える。

◆　◆　◆　◆

「お、おい、大丈夫か？」
だ、大丈夫。……ちょっと驚いて腰が抜けただけ。
土煙が晴れたせいで、私が剣に驚いてマヌケに転んだところを晒すこととなってしまった。
「立ち上がるのを手伝ってやれ！」
「は、はい！」
あ、ありがとうございます……。
万丈目君の取り巻きの人の手を貸りて立ち上がる。
もう、心臓に悪いからスタンディングデュエルやだ。ボードデュエルがいい。
「そんなんじゃアカデミアで３年間やっていけないぞ……」
お互いにデュエルのことを忘れて素の調子で話してしまう。
「コホン。ターンを続行しろ」
う、うん。私は【エアーマン】で万丈目君に直接攻撃（ダイレクトアタック）！　これでトドメ！
【エアーマン】が万丈目君に躍りかかった。
「俺は【リビングデッドの呼び声】を発動。戻ってこい【地獄戦士】！」
万丈目君の宣言とともに【リビングデッドの呼び声】が表になった。

そして【地獄戦士】が場に現れる。
万丈目
ＬＰ８００
手札１
【地獄戦士】☆４　攻撃力１２００
／【リビングデッドの呼び声】永続罠
　対象：【地獄戦士】
＼セットカード２枚
……ックッ！　攻撃を続行！
【エアーマン】が標的を万丈目君から【地獄戦士】に切り替える。モンスターの爆砕音と同時に〝ヒュンヒュン〟という何かが回転するような音が耳に飛び込んできた。
……ヒャッ！
ガッ、と再び剣が目前に突き刺さるのに対し、小さく悲鳴をあげながら私はしゃがみこんでしまう。
「アッハッハ！　勝ち気なやつだと思ったがかわいいところもあるじゃないか！」
万丈目君が本当に可笑しそうに笑い出す。さすがにヒドいと思う。
大分戦意を削がれたけど……でもまだデュエルは終わっていない。
……私はカードを２枚セット。ターンを終了。
？
ＬＰ１２００
手札０
【エアーマン】☆４　攻撃力１８００
【ガイア】☆６　攻撃力２８００→２２００
／　セットカード２枚
万丈目
ＬＰ２００
手札１
　モンスター無し
／　セットカード２枚

「さてさて……まだ続けるのか」
万丈目君は笑うのを止めて、じっと私の方を見つめてきた。
「俺は冗談で済ますつもりはないぜ。本当にいいのか？　今なら謝れば許してやるぜ？」
万丈目君のその言葉に、私は少しずつ怒りが蘇ってくるのを感じた。
謝ったりなんかしない。それに追い詰められてるのは万丈目君の方だよ。
このターンでは決着が付かなかったけど……次のターン、絶対に勝つし。
「そうか。まぁお前がそれでいいんならいいんだけどな」
何故か万丈目君は腑に落ちないような顔をしている。
「１１０番のことで何でお前がそんなに怒るのかがわからん。彼氏か何かなのか？」
……違うよ。私はただ彼のファンなだけ。
「ファン、ねぇ」
万丈目君が少し考えこむ素振りを見せた。
「そうだな、将来のデュエルキングの俺にもファンが必要だろう」
その一言とともに、今までで一番底意地の悪そうな笑みを浮かべる。
「決めたぜ。お前、俺に負けたら俺に乗り換えろ。
俺のファンになってもらうぜ！　ドロー！」
私が万丈目君に敵意を向けているのに、万丈目君はまるで私をあしらっているかのように振る舞い続ける。
「やつはスモールタウンではヒーローだったかもしれないが！
もっと上のレベルが存在することを１１０番にも！　貴様にも！
この万丈目準様が直々に教えてやろう！」
◆　◆　◆　◆
万丈目
ＬＰ２００
手札２

モンスター無し
／　セットカード２枚
？
ＬＰ１２００
手札０
【エアーマン】☆４　攻撃力１８００
【ガイア】☆６　攻撃力２２００
／　セットカード２枚
万丈目君は余裕そうに振る舞ってるけど、追い詰めてるのは私のはず……けどここは念の為。
万丈目君のスタンバイフェイズに私は【覇者の一括】を発動！
私の場で１枚のカードが表になる。
【覇者の一括】通常罠
相手のスタンバイフェイズに発動可能。このターン相手はバトルを行えない。
「フン、怖気づいたか」
ち、違うし！　ビビってなんか無いし！
……嘘です。万丈目君があまりにも自信ありげだからちょっと怖くなりました。
悔しいから言葉には出さないけど。
「だが戦闘を介さずともダメージを通す手段ならあるぜ。
リバースカードオープン！」
……え？
万丈目君の宣言とともに場に出現した装置に表情がこわばるのが自分でもわかった。それはバチバチという静電気音を発しながらこちらに大砲の口を向けていて――――。
【マスドライバー】永続魔法
自分のモンスター１体を生贄に捧げる。相手に４００のダメージを与える。
……それ禁止カードだよ！
その言葉を何とか喉の奥で噛み殺す。

近所の子にねだられたからふらっとデッキを持ちだして、「ちょっと揉んであげよう」ぐらいのつもりで相手をしたらそのカードに瞬殺された。
まぁその程度のトラウマカードである。
ダメだこの世界。ちょっと私の心を抉る要素が多すぎる。
銃口がこっち向いてるの怖いし、ちょっと避けておこう……。
そう思ってフィールドの端ににじり寄った次の瞬間。
「俺は【キラー・トマト】を通常召喚！　そして即座に発射！」
光弾がすごいスピードで私の体の脇を通り抜けて行って。
？　ＬＰ１２００→８００
思わずペタンと尻もちをついてしまった。
◆　◆　◆　◆
「ほ、ほら、もう少しで終わるんだぞ！　俺にあの言葉を取り消させるんだろ！　あとちょっとだ頑張れ！」
……やだ。もうデュエルを続けるの怖い。
「ええい！　ならせめてサレンダーしろ！」
……やだ。あの言葉は絶対取り消させるもん。
「面倒くさいぞ貴様！」
なら万丈目君は性格悪いよ。
「戦略家と言え！」
私は完全に拗ねてしまっていた。
万丈目君の性格の悪いデッキ「違う！　これは【地獄戦士】でイーブンの展開に持ち込んだ後、バーンで相手のライフを削り切るという戦略なのだ！」を相手に大幅にＳＡＮ値を削られた私はちょっと心の休養を取らなければ戦いを再開できないまでに追い込まれていて。
床に「の」の字を書きながら心を落ち着けること数分。
私が万丈目君の性格の悪さにケチを付け、それに万丈目君が言い繕い、取り巻きさんが「ああ、でもたしかに万丈目さんそんな所あるよな」って頷いて、「どちらの味方だ貴様ら！」って万丈目君が怒鳴って。
そんなことを繰り返しているうちにやっとデュエルを再開する気力が戻って来た。

お待たせしてごめんなさい、デュエルを再開しよ？
「……言いたいことはたくさんあるが、全てはデュエルが終わってからだ」
万丈目君は額に青筋を浮かべながらも、冷静にデュエルを続けようと努めていた。
ふぅ、と息を吐きターンを再開する。
「このままターンを回してしまってもいい気がするが……念押ししておくか。俺は【強欲な壺】を発動する！」
万丈目君が発動したのは、デュエリストなら知らないものがいないであろうドローカード。
【強欲な壺】　通常魔法
デッキから２枚引く。
……いいなぁ。……私そのカードを持ってないからなぁ。
「おい、そんな目で見てもやらんぞ」
い、いや、そんなこと期待してないから……。
最初の緊張感はどこへやら。すっかり弛緩してしまった空気を、でも次の一手で万丈目君は元に戻してしまう。
「ほう、ついてるのは俺もらしいな。俺は【強奪】を発動！」
……え？
【強奪】装備魔法
相手のモンスターに装備。装備モンスターのコントロールを得る。
相手のスタンバイフェイズ毎に相手はライフを１０００回復する。
「対象は【Ｅ・ＨＥＲＯガイア】だ！」
そ、そんな！　ああ【ガイア】が！
ズン、ズンと地響きをたてながら鋼鉄の巨人が場を移動する。
万丈目君の場で私に振り返って、そこで立ち止まる。
くっ、でもこのターンバトルはできない。
そしてこの伏せカードがあれば、【エアーマン】で【ガイア】を突破できる。
そんな私の腹づもりは完全に見抜かれていたらしい。

一陣の風がデュエルフィールドを駆け抜けた。
「貴様の最後の伏せは【Ｈ―ヒートハート】だな？
【サイクロン】でそれを破壊する」
万丈目君（オベリスクブルー）が本気を出すとここまで強いってことに。
私は喧嘩を売る相手を間違えたんだということに、いまさら気がついたのだった。
◆　◆　◆　◆
？
ＬＰ８００
手札０
【エアーマン】☆４　攻撃力１８００
／　魔法罠カード無し
万丈目
ＬＰ２００
手札０
【ガイア】☆６　攻撃力２２００
／【強奪】装備魔法
　対象：【ガイア】
【マスドライバー】永続魔法
＞セットカード１枚
拮抗しているようでその実、絶対に届かないところに万丈目君の水準はあった。
戦略でも、ドローでも完全に負けている。
「お前の切り札は俺のフィールドに居るぜ。
はたして下級モンスター１体と手札１枚で何ができる？」
万丈目君の挑発。
その挑発に私はもう怒りを覚えなかった。
私が覚えたのは、純粋な憧憬。
今ならわかる気がした。

万丈目君はよく十代のことを知りもしないで貶したけど、それは傲りからなんかじゃなくて。
オベリスクブルー1年のトップとしての実力と自負を確かに持っていて。
自分が負けるところを微塵も考えていないところは、どこか十代を見ているような……。
「どうした？　さっさとドローしろ。それとも本当にサレンダーするか？」
なかなかカードを引こうとしない私に業を煮やした万丈目君がドローするように促してきた。
……万丈目君にあの言葉は取り消させたいのは嘘じゃないよ。
……でも、正直もうこのデュエルに負けてもいいと思ってる。
「は、急にどうした」
もう私は万丈目君のファンだよ。
でも、だからこそ！
勝っても負けても最後まで全力であなたに立ち向かいたい！
私のターン！　ドロー！
「勝っても負けてもか……勘違いするなよ編入生。最後に勝つのはこの俺だ！　はじめから貴様は俺の足元にも及ばない！」
万丈目君のそんな不遜な物言いも。
何だか本当に無敵の悪役みたいで、カッコイイと思ってしまった。
……それでも万丈目君に勝っちゃう十代パない。
そして。
私がドローしたのは、常識はずれの〝融合〟魔法。
行くよ万丈目君！　私の全力で勝つ！
発動、【マスク・チェンジ】！
場の【エアーマン】が跳躍する。
そして、どこからともなく現れた光り輝くマスクをその掌に掴んで、顔に近づける。
閃光の中で【エアーマン】が変身した。
「なんだこの召喚方法は!?」

「モンスターを変身させる速攻魔法だと!?」
光り輝く【エアーマン】を見上げて、万丈目君の取り巻きさんたちが叫ぶ。
これが【ＨＥＲＯ】にのみ許された、〝チェンジ融合〟！
「チェンジ融合、だと!?」
【マスク・チェンジ】速攻魔法
場の【ＨＥＲＯ】モンスターを墓地に送り、同じ属性の【Ｍ・ＨＥＲＯ】モンスター一体を融合デッキから特殊召喚する。
超変身！　来て、【Ｍ・ＨＥＲＯ（マスクドヒーロー）カミカゼ】！
私の場に、軽やかに降り立つ一体のヒーロー。
【Ｍ・ＨＥＲＯカミカゼ】☆８融合モンスター
【マスク・チェンジ】の効果でのみ特殊召喚
攻撃力２６００
「何だこのモンスターは！　こんな召喚条件のモンスターが存在するのか！」
驚愕に顔を歪ませて万丈目君が叫ぶ。
……ズルみたいなものだけど。
でもこれで終わり。
【カミカゼ】が飛翔する。
バトルに入る！
【カミカゼ】で【ガイア】を攻げ……！
「ちっ！　リバースカードオープ……！」
「ビーーーーーー」
私の攻撃宣言も、万丈目君のカードの発動の宣言も、デュエルディスクの異常動作音に掻き消されてしまった。
……え？
ソリッドビジョンが掻き消える。
【カミカゼ】も【ガイア】も。空に溶けていって。
私と万丈目君のデュエルは決着が着く直前に、「ディスクの強制終了」という形で中断されてしまった。
◆　◆　◆　◆

その後、自分のやらかしに気がついて震えていた私に万丈目君が気付いてくれて。
「目撃者はいないな！」
「はい！　あたりに人影は無いみたいです。
多分寮での歓迎会があるからそっちに皆行ってるものかと！」
「よし、俺達もずらかるぞ！」
誰にも見られていないことを確認して私達はデュエルフィールドを離れたのだった。

「さぁ、さっきのことについて納得のいく説明をしてもらおうか」
そして寮の手前まで逃げてきたところで万丈目君が詰問して来る。
え、えっとさっきのはですね。私の使ったカードに問題があったというか……。
「万丈目さん、もしかして不正カードってやつじゃないですか？
それでディスクが誤作動を起こして……」
「おいおい、それって犯罪じゃないか！
カードの偽造なんてバレたら退学どころじゃない。下手したら懲役刑だぞ！」
ち、違うの！　別にそういう訳じゃなくて！
万丈目君の取り巻きさん二人があらぬ方に誤解を始める。
ああ、こういう誤解を受けないようにちゃんと言い訳を考えてきたはずなのに……。
「……なるほど。新（ニュー）カードのテスターか」
ボソリと、万丈目君が助け舟を出してくれた。
「どういうことですか万丈目さん」
「多分なんだが……」
そして、私がしようとしていた言い訳の代弁してくれる。
「そもそもカードを偽造してもディスクは読み込みはしない。オリジナルカードを作っても無意味なんだ。
と、考えるとこいつの使ったカードは初めて見るカードだったが、オリジナルカードではない様子。

ディスクがちゃんと読み込んでいたからな。
考えられる可能性は二つ。
コイツが凄腕のハッカーで、海馬コーポレーションのメインサーバーに何らかの細工を施してオリジナルカードをさも公式のカードのように好きに使えるようにしているという可能性。
却下だ。
あのメインサーバーを籠絡できるほどの腕前があるなら、最後にあんなヘマはしない。
最後に残る可能性は……コイツ自身はへっぽこで、さっきのも本当にただの不具合だったってところか。
デバッグが不十分な新カードを勝手に使ったからディスクが誤作動を引き起こし、怒られるかもって震えてたんだろ」
「な、なるほど……」
な、なるほど……。
「なんで、貴様まで納得するのだ。やはりハッキング……」
ち、違うよ！
ちなみに厳密には万丈目君の説明も違う。私の使う【M・HERO】はそもそもアニメには存在しないカード群だ。
【HERO】のストラクチャーデッキに入っていたものの、この世界では生まれることなく、使われることもなかったカードたち……この世界にデッキを持って迷い込んだのが私だけな以上、正真正銘この世界で私しか持っていないカードたち。
それをエド君がペガサス会長に掛けあってくれて、この世界でも使えるようにサーバーに調整をしてくれている途中だったのだ。でもそれを説明するのは私のことをちゃんと説明しないといけないわけで。
万丈目君の説明に便乗することに決める。
テストカードだったのに、それを無理に使おうとしたからあんな感じに……万丈目君ごめんなさい。
「フン。全力でやれるようになったら教えろ。その時まで預けといてやる」

……うん！　次戦う時には絶対訂正させるから！
「そう言えば歓迎会がもう始まってるんじゃないか？」
……あ。

◆　◆　◆　◆

「万丈目さん、あの子無口だったけど何だか忙(せわ)しない子でしたね」
太陽がそんな事を口にする。
無口？　バカ言え。あれは相当にお喋りな部類だったろ。
もしかしてお前の眼鏡は度が入っていないのか？
「い、いや俺もほとんど喋っていないように見えましたが……」
取り巻き達が何だかうるさいが、そんなことはどうでも良かった。
あの女は借り物だったデュエルディスクをつき返してくると、走って歓迎会に向かって行った。
あの女は多分、デュエルだけじゃなく生き方そのものが直情的で御しやすいタイプの人間だ。
簡単に誘導に乗るし、受け流せば自爆する。ハッキリ言ってカモだ。
俺の目的にあの女は気づいていない。
俺が１１０番とやるための前座としたことに。
クロノス教諭をまぐれで倒したに過ぎない１１０番にアカデミアの壁の高さを教えてやるのだ。
無策で挑むのは馬鹿がやることだ。俺はそんなことはしない。【ＨＥＲＯ】の分析をするため、あの女を挑発してデュエルに乗せ、全力を尽くさせた。
「しかし万丈目さん、最後慌ててましたよね？
最後の攻撃がもし通っていたら負けてませんでした？」
……太陽。お前の眼鏡には本当に度が入ってないのか？
デュエルディスクにセットされていた最後の１枚を表にする。
【魔法(マジック)の筒(シリンダー)】通常罠
相手の攻撃を無効にし、その攻撃ダメージを相手に与える。
結局、俺には最後まで余力があった。

【ＨＥＲＯ】なんざ俺の相手じゃない。
少なくとも、今は。

闇夜の巨人デュエリスト

【カミカゼ】が不発だった万丈目君とのデュエルから数日。

「これが……こうで、これがこう……ほれ。
同じ手札の内容なら先のターンで罠を伏せられたプレイヤーのが有利になるんだ」
なるほどなるほど。
万丈目君が説明を書き込んだノートを覗き込みながら、万丈目君の話に相槌を打つ。
「……というわけで先攻を取ったほうが有利な場面が多くなるわけだ。わかったか？」
でも、攻撃できるのは後攻からだから……やっぱり先攻有利なんてないんじゃ……。
「一体！　何度言わせれば！」
「万丈目さん、もうすぐ門限です！　そろそろ引き上げないと……」
「くっ、すぐ行く！」
……今日の授業は、ここで終わり。また明日よろしくお願いします。
「とにかく、俺が言ったことの方が正しいのだ！　よく復習して忘れないようにしろ！」
「万丈目さん時間がないっすよ！」
放課後の図書室。
その片隅で私と万丈目君は太陽君たちに急かされ、教科書と文房具を片付ける。
あのデュエルの後、私は万丈目君からデュエルタクティクスを教わるようになっていた。
◆　◆　◆　◆
デュエル・アカデミアはデュエルの学校だから当たり前のことなんだけど、たくさんのデュエルに関する授業が存在する。
クロノス先生担当の【デュエル理論】と【実戦デュエル】。

樺山先生担当の【公式ルール】。
あとこれは実際デュエルに関係があるのかよくわからないけど……大徳寺先生の【錬金術】などだ。
そして選択制の授業の中に【メタ戦術】という授業があるんだけど。
この授業が思いの外難しかったのだ。
担当は佐藤先生というウェーブのかかった長髪と丸眼鏡が特徴的な男性教師。
元プロだって話を聞いたのだけど、それも相まって凄く授業のレベルが高くて……。
なんというか、専門用語が多すぎてとてもじゃないがデュエルの話をしているようには思えないまであるのだ。
ハンドアドバンテージがどう、とか。エンドフェイズでのクイックスペルでの除去がどう、とか。スペルスピードの観点からカウンター罠の絶対性について考える……とか。
そもそも私は現実世界では数年デュエルから離れていたのだ。どうにかこうにかエド君に協力してもらってデュエルが様になるくらいにはなれたかもしれないけど、とてもじゃないが専門の学習についていけるような準備はしていない。
選択授業で取るのが自由なこともあって、佐藤先生も手加減をしてくれるかわからないし……2回めの授業の終わりに受講の取り消しを申し出たのだ。
佐藤先生は「君の自由だ。好きにしなさい」と言ってくれた。
私もお辞儀をして、お礼を言って、そのまま帰ろうとしたのだけど……
「ただ、〝数少ない〟熱心に授業を聞いてくれる生徒をただ放り出すだけというのも芸がない。
君が良ければ成績優秀な生徒を付けよう。彼に勉強を教わるといい」
先生は私を引き止めて、一人の男子生徒の名前を出した。
「万丈目君あたりならやってくれるだろう……どうしたのかな、微妙な表情をして」

結局私は〝授業がわかるようになるならわかったほうがいいや〟って思って佐藤先生の提案を受け入れて、それから紆余曲折あって、結局万丈目君に勉強を教えてもらえるようになった。
紆余曲折についてはここでは割愛するけど……そのとき私は佐藤先生のダークサイドを垣間見たような気がした。
万丈目君いたってはようなではなく本当に見たのだと思う。
◆　◆　◆　◆
じゃあ私はこっちだから。明日もよろしくね万丈目君。
「フン。こっちはよろしくするつもりはないんだがな。約束だから仕方なくだ」
それぞれの寮へ向かう道の岐路部分で万丈目君達3人と別れる。
女子は全員ブルーに所属なので帰り道が途中まで一緒なのだ。
万丈目君は佐藤先生に負けたことをまだムカムカしてるのか、帰り道では愛想が悪い。
とはいえ、一緒に帰ることを言い出したのは実は万丈目君の方だったりする。
人付き合いが元々広い性格をしているわけでもないので、少しでも仲良くしてくれようとすることはちょっと嬉しかったりした。
私の学校生活は予想よりもずっと充実していた。
私の世界はこの場所ではない。私はきっと元の世界に帰らなくちゃいけないんだと思う。
方法は今のところわからないけど、エド君と斎王さんが目下探索中。
他に協力者もいるらしいし、きっと大丈夫だ。
でもその方法が見つからなくても……こちらの世界でプロを目指してデュエルに触れながら生活をするのも悪くないような気はしている。
帰れなくても、何事もないなら無くてもそれでもいいかなってちょっと思い始めている私がいた。
でも、私はすっかり失念していた。
ここはＧＸの世界だ。十代たちは何事も無く学校生活を送れてい

たわけではない。
同じ時代、同じ場所で生活している以上、アニメで十代たちの巻き込まれたトラブルはすぐそこで起きていて……ともすれば巻き込まれないわけがないのだ。
◆　◆　◆　◆
……あれ？　あれれ？
午後八時。
夕食と入浴が終わって寮の自室で机に向かおうと思っていた時、私はカバンの中に筆箱が無いことに気がついた。
机の上にカバンをひっくり返して中身を確認する。やっぱり無い。教科書とノートだけだ。
最後に筆箱を見たのは図書館で万丈目君に勉強を教わってる時。図書館に忘れたとしか考えられない。
どうしよう……筆記用具はあれだけしか無い。あれが無いと明日の授業にも支障が出る。
朝一で取りに行こうとしても一限には遅れるし……。
……それに今日中に復習しっかりしておきたいな。
でも寮の点呼が９時にある。図書館まで歩いて１５分くらいだけど、暗い道だから気を付けて行かないと……うーん。
それに夜間外出はれっきとした校則違反だ。見つかったら怒られるのは間違いない。
なんとなく一生懸命教えてくれてる万丈目君の顔が思い浮かんだ。
……いや、でもやっぱり復習しておきたいし。
万丈目君が教えてくれたことを少しでもしっかり覚えておきたい。
……でも見つかって怒られるのも嫌だなぁ。
結局あれこれ悩んだ挙句、八時十五分ごろ私は図書館へと向かうために寮を抜けだした。
◆　◆　◆　◆
筆箱はすぐに見つかった。
結局司書の先生に見つかっちゃったけど、「今回は目をつむりま

す」って言われてペコペコしながら図書館を出る。
うー、寒い。潮風は冷えるって聞いてたけどここまでとは。
私はブルー寮のコートを羽織り、帰り道を進んでいた。
アニメを見ていてずっと疑問に思っていたことの一つに「オベリスクブルーの男子はコートを着ていて暑くないのかな？」ということがある。あと女子にはコートが無いのかも。
結論から言うと暑いらしい。暑いんだ。脱げばいいのに。
そして女子の制服にもコートはあるんだけど……デザインが、と言うよりサイズが問題で誰も着ないのだ。
ＬサイズとＸＬサイズしかなくて基本皆ダボダボになる。なので誰も買わないし、着ない。
私も要らないかなって思ってたんだけど、エド君がどうしても買うように勧めてきたので一着だけ持っていたのが功を奏したのだ。
エド君は「なるべく着用するように」って口を酸っぱくしてたけど……やっぱりダボダボで普段の着用には向いてないような気がする。
そう言えば、エド君はどうしてこれを私に着せたがったんだろう？

余計なことを考えながら歩いていたのが行けないのかもしれない。
時計を見たら八時五十分をまわっていた。正直時間ギリギリだ。
あっ、ヤバ……。
あと寮まで半分くらい。このまま行ってたら寮監の鮎川先生と部屋の前で鉢合わせかねない。
……よし。林を突っ切ろう。そうすれば直線になって距離を稼げるはずだから、もう少し余裕ができるはず。
意を決し私は林の中に踏み込んだ。
そしてわずか一分でその判断を後悔する。

「お前、オベリスク・ブルーのデュエリストだな」

暗がりのなか、最初は岩がしゃべっているのかと思った。
ゾッとして駆け抜けようとしたら岩だと思っていた何かが進行方

向に立ちふさがってくる。
その巨体は月明かりを遮って、巨大な影を落とす。
ブルーの男子から奪ったコートを幾重にも纏って、正体を隠した巨人。
まごうことなき不審者を前に、私は貞操の危機を感じて慄えることしかできなかった。
た、助けて……エド君。

この時焦りと恐怖で私は気づくことができなかったのだが、
「どうしよう小原くん、間違えて女子を……これってマズイんじゃ」
《い、いや大原、このまま返すほうがマズイ！
あくまで、デュエルが目的だってことを強調するんだ！》
「そ、そうだね。わかったよ」
目の前の巨人さんも（小声とはいえ）思わず自分たちの名前を口走ってしまうぐらいには動揺していたのだった。
◆　◆　◆　◆

「万丈目さん。司書の木崎さんから連絡が」
「何？　こんな時間に何の用があるというのだ」
〝ハッハッハッ、つれないねぇ！〟
寮の談話室の一角、俺はそこであいつに明日教えてやる内容の資料をまとめていた。
そこに太陽の奴がＰＤＡを持って声を掛けてくる。
木崎の声が聞こえる。太陽の手に持っているＰＤＡが通話状態のようだ。壁の時計を見たら８時３７分。
どうせ明日も図書館に行くのだ。わざわざこんな時間にかけてくるということは……面倒事しかありえない。
中等部から上がってきた生徒なら皆知っているアカデミア（アカデミア）の鉄則（ジンクス）だ。
〝ここでは、頼まれ事は全て面倒事に発展する〟
本当は話を聞かずに断るのが一番なのだが、場所（図書館）を借り

ている以上強く出ることも難しい。
最低限の礼儀として話ぐらい聞いてやらねばなるまい。
太陽の手からＰＤＡを受け取る。
「こんな遅くに何の用でしょうか？　忙しいので手短にお願いします」
〝慇懃無礼ってやつだね、ハッハッハ！　あと僕を着拒するのをやめてよ！
一応太陽君のアドレス聞いといて良かったよ！〟
「要件をお願いします」
木崎のテンションにはイラッとしたが、ここで反応しては奴の思う壺だ。
早急に通話を終わらせるためには誘いに乗らないことが重要なのだ。
〝つれないねぇ！　まぁいいかな。さっきあの娘（こ）が忘れ物を取りにこっちに来たのさ！
夜道は暗いからねぇ。君、迎えに来てよ！〟
「お断りします」
〝ええ！　なんでさ！〟
「何でもなにも、点呼まであと２０分程度ですし」
〝僕がクロノス先生に話を通しておくからさ！〟
「じゃあ、忙しいので。そもそも俺の仕事は教えることまでだ。
彼女のお守りは仕事に含まれていない」
〝いいや。彼女がこんな時間に出歩いているのには君に責任があるよ〟
「は？」
〝君がしっかり復習するように言った。彼女はその言葉に従うために忘れ物を取りに来た。
ほら。やはり万丈目君が悪いよ〟
無茶苦茶だとは思ったが、だからといって一蹴することも難しい絶妙なポイント。
何かしら言い返してやろうかとも思ったが、止めた。時間の無駄

だ。
「……わかった。チッ」
〝よかった。じゃあね〟
通話が切れてツー、という音が尾を引く。
「チッ。太陽、今から俺は出る。
遅くなったらクロノス教諭には木崎の用事だと断っておいてくれ」
太陽の奴の手にＰＤＡを返しながら告げる。
「それと……ディスクを取ってくれ」
まず間違いなく面倒事になるという予感が俺にはあった。

デュエルアカデミアには２つのジンクスがある。
１つ目が、〝ここでは、頼まれ事は全て面倒事に発展する〟。
そして。
実にデュエルの学校らしい、もう１つのジンクス。
〝ここでのトラブルは、大体デュエルで解決できる〟
木崎はすぐ、俺に面倒事を押し付ける。
だから俺は木崎が面倒で苦手なのだ。
◆　◆　◆　◆
腰が抜けて尻もちを着いている私に、巨人が覆いかぶさるように近づいてきて……
い、いやっ……！
「デュ、デュエルを、受けてもらう！」
助けて、エドく…ん……？
……デュエル？
コクコクと巨人が頷き、左手を差し出してきた。
そこには、月明かりを鈍く反射するデュエル・ディスク。
「乱暴はしない……レアカードを賭けたデュエルを受けろ……。
オベリスク・ブルーなら当然受けるな？」
あ、あの。
私、今デュエルディスクを持っていなんですけど……。
「!?」

《!?》
私の答えが予想外だったのか、巨人さんがフリーズする。
「ど、どうしよう……」
《い、いや俺もわからない。カードだけ奪うわけにもいかないし……。
でもとりあえずこのままじゃまずい……》
独り言を始める巨人さん。理由はわからないけど、何だか隙ができたようだ。
今のうちに、逃げよう。
そう思って腰をあげようとしたのだけど……うまく足に力が入らなくてまた転んでしまう。
《お、おい！　逃げられるぞ！》
「か、カードは置いていけ！」
《ちょ、待っ……！》
そして、逃げようとしたことが巨人さんの怒りを買ったらしく、巨人さんが私に手を伸ばして来て。
デッキはいつも腰のポーチの中だ。私はポーチを庇うように蹲ってギュッと目をつむる。
怖いけど……だからといって無抵抗のまま私のデッキを――――エド君と一緒に組んだこのデッキを奪われるのだけは嫌だった。
どうすることもできない絶望感に押しつぶされそうになる。
誰か。誰か……！

いつまで経っても、巨人さんの腕が私に触れることはなかった。

……？
何も起きないのを不思議に思い、そっと目を開ける。
顔を上げると、横合いから伸びてきた手が巨人さんの手首を掴んで止めていた。
「……本当にトラブルに巻き込まれているんじゃないぞ全く」
巨人さんの腕を止めた人物は、ツンツンとした前髪が特徴的で。
「ポンコツか、貴様」

前髪の形が語調にも現れてるかのような喋り方。
でも、いつもは小憎たらしいはずの悪態も今は私を安心させるだけだ。
ま……ま…まんじょうめくん…！
「おいデカブツ。俺が相手になるぜ」
来るはずがないと思っていた助けが。
万丈目君が、そこには立っていた。
◆　◆　◆　◆
巨人デュエリストが数歩ほど後退る。
そして、万丈目君が私を背に庇うように前に立ってデュエルディスクを掲げた。
「事情は知らんが……俺に勝てば俺のデッキでも何でも持って行けぇ！
この女に手出しすることはこの俺が許さん！」
《オベリスクブルーの万丈目準だと、大当たりだ！
コイツを倒してしまえば俺たちを馬鹿にできるやつなんか居なくなる！》
「《相手の力量を見極めること無く、軽々にデッキを賭ける傲慢を、悔いるんだな》」
巨人デュエリストの挑発に……万丈目君は底意地の悪そうな笑みを浮かべて言葉を返す。
「傲慢なのは貴様だ。
このデュエルアカデミアで、オベリスク・ブルーのコートを着たデュエリストにデュエルを挑む意味をわかっているのか？」
「《……》」
万丈目君の挑発に、巨人デュエリストは何も言い返さなかった。
何も言い返さずに、肩を震わせていた。
そして、無言のままデュエル・ディスクを掲げる。
「《デュエル！》」

掛け声とともにディスクが点滅し、先行となるプレイヤーを自動判別する。
「……俺の先攻！　ドロー！」
先行となった彼は、静かな滑り出しでありながら、確かな敵意を持ってデュエルに臨んでいた。
「【ジャイアント・オーク】を攻撃表示で召喚！」
【ジャイアント・オーク】☆４　攻撃力２２００

先攻：巨人デュエリスト

「攻撃力は高いが、攻撃後守備表示になるデメリットアタッカー。ただの虚仮威（こけおど）しだ。……単体でならな」
背後で動けない私に、ボソボソと万丈目君が語りかけてくる。
「せっかくだから、このデュエルをよく見ていろ。いい課外授業代わりになるだろうぜ」
◆　◆　◆　◆
「《俺はさらに、カードを２枚セットして、ターンを終了する！》」
巨人デュエリスト
手札３
ＬＰ４０００
【ジャイアント・オーク】☆４　攻撃力２２００
／　セットカード２枚
【ジャイアント・オーク】☆４　攻撃力２２００　効果モンスター
攻撃後に守備表示になる。攻撃した次のターン表示形式を変更できない。
「フン。虚仮威し野郎には虚仮威しのモンスターがお似合いだぜ」
「……本当に虚仮威しかどうか、試してみるか」
「おお怖い怖い」
思いっきり相手を挑発する万丈目君。
相手からしてみれば、敵意を抱くことこの上ないのかもしれないけど……庇われている私には頼りになることこの上ない背中。

相手の場にいるのは上級モンスター並の攻撃力を持つモンスターだけど、ここまで自信満々なのだ。
きっと何かしらの対抗策あっての自信なのだろう。
勝って、万丈目君！
〝グゥゥゥ……〟
ヒッ……！
【ジャイアント・オーク】が不気味な唸り声を上げてこちらを睨めつけてくる。
別に私の応援に反応したわけじゃないんだろうけど、何だか刺激してしまったようで怖い。
少しでも万丈目君の陰に隠れようと、考えないうちに身を捩ってしまった。
私、やっぱりスタンディング・デュエル苦手。
スッと、万丈目君が一歩ずれて【ジャイアント・オーク】から私が隠れる位置に立つ。
「余計な刺激を与えるな」
ご、ごめんなさい万丈目君。
……でも万丈目君も相手のこと挑発してるよね？
「俺はいいのだ。
挑発しても後で恥をかかないからな」
「……お喋りをしてないでターンに入れ」
「おっと悪いな。俺のターン、ドロー！」
巨人さんに急かされて万丈目君がカードを引く。
手札を一瞥する。
背後からだから表情がよくわからないんだけど……手札を見た時の万丈目君の横顔は笑っていたような気がした。
「全く……引きが強いと苦戦するのに苦戦するな。
俺は【デビルズ・サンクチュアリ】を発動する！」
万丈目君は引いたカードをそのままディスクに置いた。
「いでよ、【メタルデビル・トークン】！」
地面が淡く光り、光の筋で魔法陣が描かれる。

薄い靄が立ち上り、その中央にいつの間にか1体の悪魔の像が出現していた。
……あの石像がトークン？
確かに強そうだけど、そんなに攻撃力が高そうには……。
なんてことを思っていると、魔法陣の中に石像が沈み始めた。
あれ？
魔法陣に水面のような波紋を残して石像が完全に沈み込む。
そして今度は魔法陣から鏡色の木偶人形らしいものがでせり出してきた。
【メタルデビル・トークン】 ☆1　攻撃力0
……あれ？
この木偶人形がトークンさん？
さっきの石像の方が強そうな気が……
なんて見当外れなことを考えているのはこの場では私だけのようだった。
「攻撃を反射するモンスタートークンか。厄介だな」
「フン。少しはできるやつのようだな」
巨人さんは何かに気がついたようで、万丈目君は私に何も説明をしてくれない。
これって言わないと通じないパターンだよね。
あ、あの万丈目君。
「……チッ。授業にならないからな」
私の問いかけに気がついた万丈目君がカードを見せてくれる。
【デビルズ・サンクチュアリ】 通常魔法
自分の場に【メタルデビル・トークン】（☆1／闇／悪魔族／攻0／守0）を特殊召喚する。このトークンは攻撃できず、このトークンの戦闘によって発生するダメージは相手が受ける。このトークンのコントローラーは自分のスタンバイフェイズに1000ポイントのライフを支払うか、このトークンを破壊する。
あ、ありがとう……これ、強いね。

「フン」
あまりの強さに軽くひいてしまった。
万丈目君はカードを受け取ると、鼻を鳴らしながらそれを墓地に置いた。
「この程度で驚くな。まだまだ強いカードなんていくらでもあるんだからな」
う、うん。
初めて見たカードだけど、私でもこの駆け引きの内容がわかった。
万丈目君は弱いトークンをあえて攻撃表示で出すことで、その能力で巨人デュエリストさんの攻め手を封じてしまったのだ。
下手に攻撃をすれば、【ジャイアント・オーク】の高い攻撃力が仇になる。
……凄い。こんな戦い方もあるんだ。
でも、感心してるのは私だけのようだった。
「フン、だが所詮は時間稼ぎにしかならない一手だな」
巨人デュエリストさんは鼻を鳴らすと、万丈目君を挑発するような言葉を吐いた。
「……〝ダメージレースの巧手〟と言えば聞こえはいいが、要はカウンター狙いで受け身なだけ。
自分からの攻め手を持たない決定力にかけたデュエルスタイルだ」
巨人さんは揶揄したような口ぶりで言葉を続ける。
「《トークンの維持コストで自滅みたいな、馬鹿な真似だけはよしてほしいものだな》」
……そんな言い方！
万丈目君も確かに口は悪いけど、だからと言ってここまで言われる必要は無い……と思う。
でも、当の万丈目君は澄ましたもので。
「達者なのは口だけか？」
たった一言で巨人さんの挑発に切り返していた。
「デュエルが終わっても同じ言葉が吐けたらヨシヨシしてやるぜ？
俺はカードを2枚セット！」

万丈目
手札３
ＬＰ４０００
【メタルデビル・トークン】☆１　攻撃力０
／　セットカード２枚
「ターンを終……」
万丈目君のターン終了宣言。
「《この瞬間！》」
それに被せるように、巨人デュエリストさんが〝吼えた〟。
まるで二人で叫んでいるかのような、激しい気迫のこもった宣言をする。
「《【悪夢の迷宮】を発動する！》」

白い靄。
その中を怨嗟の声をあげながら飛び回る何かが、モンスター達にまとわりつく。

《口だけだと!?
違う、口だけなのはお前たちオベリスクブルーの方だ！》
「俺たちは……口だけなんかじゃない！」

私は気圧されるだけで何も言うことができなかった。
ただ怯えて万丈目君の陰に隠れるだけ。
地雷を踏み抜いた当の万丈目君は、
「……どうしてコンプレックスがある奴はこうも面倒なんだろうな」
悟ったようなセリフだったけど、その言葉には何か含みがあって。
でも、このときの私はそのことに気付いてあげる余裕なんてなかった。
◆　◆　◆　◆
それぞれの場で、【ジャイアント・オーク】と【メタルデビル・トークン】が膝をついていた。

【ジャイアント・オーク】　守備力０
【メタルデビル・トークン】　守備力０
【悪夢の迷宮】　永続罠
　エンドフェイズ毎に表側表示のモンスターの表示形式を全て入れ替える。
「チッ。やはり表示形式を変更するカードとのコンボだったか」
　万丈目君は何が起きたのか把握していたみたいだけど、私には何が何だかまるっきりわからなかった。
「わかってないだろうから言っておく。
【メタルデビル・トークン】を無力化された上、このままだと奴の【ジャイアント・オーク】は毎ターン攻撃を仕掛けてきやがる」
　駆け足の説明。
　何とか飲み込もうとしたんだけど、
「《俺のターン！
　場の【ジャイアント・オーク】を攻撃表示に変更！
　さらに【ジャイアント・オーク】をもう一体召喚！》」
　私が理解するのを巨人デュエリストさんが待ってくれるわけでもなく。
　巨人デュエリスト
　手札３
　ＬＰ４０００
【ジャイアント・オーク】☆４　攻撃力２２００
【ジャイアント・オーク】☆４　攻撃力２２００
／【悪夢の迷宮】　永続罠
＼セットカード１枚
《やってやれ大原！》
「バトル！　【ジャイアント・オーク】で【メタルデビル・トークン】に攻撃！
　さらに万丈目にダイレクトアタック！」
　棍棒を振りかぶり、唸り声とともに２体の悪鬼が襲いかかってくる。

私は恐怖でただ身を竦めることしかできない。

万丈目君の場で、リバースカードが1枚立ち上がるのが見えた。

「まぁ、俺がこのままにするわけがないんだけどな。

リバースカードオープン！」

もはや二人の駆け引きは私の理解レベルを遥かに超えていた。

万丈目君が発動したのも、永続罠。

「【血の代償】！

その効果によって俺は【メタルデビル・トークン】を生贄に捧げ……」

【メタルデビル・トークン】が光の渦に飲み込まれて、それを狙っていた【ジャイアント・オーク】の棍棒が空を切った。

打ち倒す目標を見失い、万丈目君の場で悔しそうな唸り声をあげる【ジャイアント・オーク】。

何かを殴りつけなければ落ち着けないのか、キョロキョロと周囲を見回す。

そして私と目が合った。

【ジャイアント・オーク】が喜色に顔を歪めたような気がした。

背筋に冷たいものが走る。

【ジャイアント・オーク】が棍棒を振り上げた。

ヤバいって思ったけど、体が動かなかった。

棍棒を打ち下ろす動作がやけにゆっくりに見えて……

――そして、横合いから伸びてきた腕が【ジャイアント・オーク】を相手のフィールドまで殴り飛ばした。

「俺は【邪帝ガイウス】を召喚する！」

万丈目君がその名を口にして、初めて私は今起きたことをちゃんと認識する。

……万丈目君の召喚したモンスターが【ジャイアント・オーク】から、私のことを守ってくれた？

その腕の持ち主は、魔人だった。
闇色の仮面。闇色の鎧。闇色のマント。
闇色にその身全てを包む、上級悪魔。
その魔人は主人（万丈目君）の前に一歩進み出て、
〝……GYYYAAAAAAAAAAAAAA!!〟
闇夜を切り裂かんばかりの絶叫を放った。

◆◆◆◆

ソリッドビジョンのデュエルにおいては、生贄召喚時に種族固有の演出（エフェクト）が発生する（らしい）。
機械族なら【古代の機械巨人】のときみたいな〝振動〟。
まだ見たことがないけど鳥獣族なら〝竜巻〟、炎族なら〝炎柱〟と言った具合らしいんだけど……悪魔族の〝絶叫〟ってこんなに激しいの？
近距離で【ガイウス】の咆哮を聞いた私はあまりの音量にちょっと目がチカチカしていた。
そして、私がチカチカから回復する頃にはデュエルは既に終わっていた。

◆◆◆◆

万丈目
手札2
LP3500
【邪帝ガイウス】☆6　攻撃力2400
／【血の代償】　永続罠
＼セットカード1枚
巨人デュエリスト
手札3
LP3800
【ジャイアント・オーク】☆4　攻撃力2200

／【悪夢の迷宮】　永続罠
＞セットカード1枚
【血の代償】　永続罠
ライフを５００ポイント払いモンスターを召喚できる。この効果は自分メインフェイズと相手バトルフェイズに使える。
「……いったい何が起きたんだ」
対峙しているデカブツがそんなことを言うのが聞こえた。
勘弁してくれ。この女に説明をするだけでも疲れるのだ。
起きたことは至ってシンプル。
俺がバトル中に【ガイウス】を召喚して、【ジャイアント・オーク】を返り討ちにした。ただそれだけだ。
そして、もう一体の【ジャイアント・オーク】にも退場願おう。
「【邪帝ガイウス】の効果で【ジャイアント・オーク】を除外する！やれ！」
俺の命令に従い【ガイウス】が両手を掲げ、その間に黒いエネルギーの球体を生み出す。
球体が広がり、渦をまき、その口を拡げていき……その中心に発生する重力に、相手の場の【ジャイアント・オーク】が引き摺られる。【ジャイアント・オーク】は棍棒を地面に突き刺し抵抗するが、そんなことをしても無駄なものは無駄だ。
棍棒が地面から引っこ抜け、【ジャイアント・オーク】の足が浮いた。
叫び声を一つ残し、そのまま渦の中へと消えていく。
【邪帝ガイウス】　☆６　攻撃力２４００　効果モンスター
このモンスターの生贄召喚に成功した時、場のカードを1枚除外し、それが闇属性モンスターであれば相手に１０００のダメージ。

巨人デュエリスト
手札３
ＬＰ２８００
モンスター無し
／【悪夢の迷宮】　永続罠

＞セットカード1枚
《アタッカーを除去だと、嘘だろ……。
いつもみたいなダメージ・コントロールじゃない戦い方……対策……されてたのか……》
「あ……ああ……」
巨人が観念したかのような唸り声をあげる。
フン。コイツも所詮はこの程度か。
コイツは俺の最初の言葉を鵜呑みにしたのだろう。
〝事情は知らない〟？……馬鹿も休み休みに言え。
フリーのディスクが談話室に常備されるくらいには、オベリスクブルーでも〝ブルー狩りの巨人〟は警戒していたのだ。
デメリットアタッカーによるハイビートも、【悪夢の迷宮】とのコンボで守備を封じることもリサーチ済み。
怒りで視野を狭めた時点でコイツに、いやコイツラに勝ち目など無かったのだ。
《ま、まだだ。まだ、終わりじゃ……終わりなんかじゃ……》
「お、俺はカードを2枚セット。
……ターンを終了する」
巨人がノロノロとした動きでカードをセットするが、もうさっきまでの覇気は感じられない。
勘づいたのだろう、俺の手のひらの上で転がされていたことに。
ある程度できるやつのようだが……本当に賢いのならばまず俺に喧嘩をふっかけないことだ。
「俺のターン、ドロー！」
ドローカードを見る。
……全く、苦戦することに苦戦するな。
今引いたそのカードをディスクに叩きつけた。
「【大嵐】を発動する！」
【大嵐】　通常魔法
全フィールドの魔法・罠カードを破壊する。
巨人野郎のうめき声。

何もカードを発動しない。
竜巻に巻き上げられて場の全ての魔法・罠が爆砕する。
そしてこれでジ・エンドだ。
「【地獄戦士】を召喚！
そして【邪帝ガイウス】を攻撃表示に変更！」
万丈目
手札１
ＬＰ３５００
【邪帝ガイウス】　☆６　攻撃力２４００
【地獄戦士】　☆４　攻撃力１２００
／リバースカードなし
巨人デュエリスト
手札１
ＬＰ２８００
モンスターなし
／リバースカードなし

もはや何の対抗策もないのだろう……場を見りゃわかるか。
ただただうなだれる巨人デュエリスト。
「【ガイウス】と【地獄戦士】の直接攻撃！」
俺の宣言を受けて、【ガイウス】と【地獄戦士】が斬りかかる。
ソリッドビジョンとはいえ、体を切りつけられるのは堪えるのか巨人デュエリストは小さく呻いた。
巨人デュエリスト　ＬＰ２８００→４００→０

万丈目　ＷＩＮ

……オベリスクブルーが口だけとか言ったか？
少なくとも、俺は口だけじゃあ無いぜ。
◆　◆　◆　◆
デュエルに負け、へたり込んでいる巨人に近づく。

「……学校に、突き出すなら突き出せ」
投げやりな言葉を吐く巨人。
……コイツは何を勘違いしているんだ？
「アンティだ。【悪夢の迷宮】を寄越せ」
「……へ？」
俺の要求に素っ頓狂な声で返答する巨人。
……コイツはオベリスクブルーを甘く見過ぎだ。
この巨人（おそらくイエローかレッドの生徒）はオベリスクブルーの生徒からアンティでカードを巻き上げているようだが……果たしてそれの何が悪い？
力が強い奴が弱いやつを踏んづけてのさばるのは当然の摂理だ。
コイツにカードを巻き上げられたオベリスクブルーの誰一人として、教師に報告をしているものはいない。
流石に生徒間での噂になっているのをクロノス教諭など一部の敏い教師が聞きつけてはいるようだが、それはそれ。
コイツを教師に引き渡して終わらせるようなつまらない真似、負けてきたブルー生の誰が許すというのだろう？
俺達は、自分の力で、自分のプライドでこのブルー狩りを踏みつけなければ気がすまないのだ。
「オベリスクブルーの総意だ。
貴様らが反抗するなら徹底的にやり合う、ってな」
《……なめやがって》
「後悔することになるぞ」
フン。脅し文句のつもりかもしれないが俺にとっては負け犬の遠吠えに過ぎない。
「御託はいい。カードだ」
巨人はデッキからカードを抜いて投げてきた。
投げられたカードを二本の指で挟んで取る。
巨人は木々の暗がりの中に身を潜めて、溶けるようにその姿を掻き消した。
◆　◆　◆　◆

え、え？　あれ？
デュエルは!?　決着はどうなったの万丈目君！
「ええい騒ぐな！　俺が勝った、だから慌てるな」
勝ったんだ！　やっぱり万丈目君て凄い！
……ええと、あのね。
助けてくれて、助けに来てくれて、ありがとう。
「偶々だ。それにブルーの男子総出で追っていた相手だ。いずれ戦うつもりだった。感謝される謂れはないぞ」
ううん。ありがとう、万丈目君。
それでね……
「……どうした？　妙に殊勝な態度だが」
いろいろあって……もう……体力が…。
「あ、おい！　こんなところで眠るな！」
……。
……zz。
「起きろ！　また襲われたいのか！　おい！」
「……ったく。1回助けられたぐらいで信用しすぎだろ」

◆　◆　◆　◆

後に聞いた話なのだが、万丈目君は私をおぶって寮まで連れてきてくれたらしく。

怖い目にあったはずなのに、その日は何だか素敵な夢を見た気がしてよく眠ることができた。